
真剣で怠け者に恋しなさい!

ブラッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で怠け者に恋しなさい！

【Nコード】

N07570

【作者名】

ブラッド

【あらすじ】

これは私の作品『D・C・？』やる気があるのかわからない転生者の生活』の主人公の転生先がもしも『マジこい』の世界だったらのお話です。

ヲタ神に手違いで殺害された、主人公はチート能力をもらって、マジこいの世界にと、赤ちゃんからスタートする。主人公は孤独の女の子と友達になり、風間ファミリーの一員として、怠け、暴れ、嵐を呼ぶ。やるきがあるのかわからないのかわからない主人公が繰り広げる、あり得たかもしれない物語とは……？

もしも城の転生先が

（前書き）

他の作品が完結していないのに、また新しい小説を書き始めたブラッドです。

マジ恋面白いですよね。的な乗りで書きたくなったので書きました。更新は遅いですが、他の作品と同時に進められるように努力します。

もしも城の転生先が

じいさん「わしのミスで人生を不意にしまったからのう。その代わりと言ってはなんじゃがお主を『マジこい』の世界へと転生してやろう」

城「なんだって？味濃い？」

じいさん「マジこいじゃ！『真剣で私に恋しなさい！』というゲームの世界に送ってやると言っておるのじゃ！！」

聞いたことがないな……エロゲか？

城「遠慮します。面倒だし」

そんな得 thểもしれない世界に行つて、だるいことに巻き込まれたらどうするんだ！俺は二ートを希望しているんだぞ！

じい「断るな！！神様自ら、人生をやり直させてやると言っているんだぞ！？それを無下にするなど……」

神様なのかよこいつ。白髭にハゲ頭のこいつが？

城「マジコイ……ねえ。どんな世界観なんだ？」

じい「うむ！それはじゃな」

急にテンションを上げて、語り出すじい。ヲタクなのかよ。神のくせに……

カクカクシカジカ……

城「死亡フラグが盛りだくさんだな」

瞬間回復とか、レーザーとか、空中を自在に動けるとか、バス停を片手で振り回せるとか…… 人体を越えている。そんな歩く核兵器共がいる世界なんて行きたくない。

じじい「安心せい。お主が向こうの世界で生きれるように、チート能力をやるうではないか」

城「どんなの・」

レーザーに太刀打ちできる程の力があればいいんだが……」

じじい「そうじゃのう…… まずはお主の身体能力を、綾崎ハ テの5倍程に上げてやるうではないか」

あの借金執事の5倍って…… その時点でチートすぎる。新幹線に轢かれても生きれるんじゃないかね？

じじい「それと、気を扱えるようにしてやるうではないか。頑張れば破壊光線を放てるのが可能じゃ。しかし、なにもせぬままだと

なんにも意味がないぞよ」

努力しろってことか……

城「わかった。それでいい」

だるいが、なにもせずに力を得れるのだから、多少の苦は瞑ってやるか。二ト希望だが、人として機能してpないのは嫌だからな。

じじい「容姿の変更はするかのう？」

見た目を変えられるってことか？ そうだな……

城「いや、必要ない。今回はこのままでいい」

じじい「今回は……お主が転生するのは初めてじゃぞ？」

城「知ってる」

頭の奥から、そう言えって誰かからの電波が届いたんだよね……。……俺の頭ん中には小人でも住んでいるのだろうか。ちょっと心配になってきた。

じじい「変なやつじゃのう……まあ、お主はそこその顔をしているから、変更せぬでもよいか」

じじいに言われても嬉しくもなんともない。

じじい「では善は急げ、じゃ。今すぐにお主を転生させてやるつやろつ」

じじいが地面に杖を付くと、俺の足元から黒い穴が発生した。

城「んなつ……！ま、またこれか……………」

じじい「がんばれよ……………」

城「てめえ！覚えとけよ……………！！！」

白いハンカチを振っているじじいに、復讐心を抱きながら、俺は落ちていくのであった。

もしも城の転生先が

（後書き）

素人なりに頑張ります

ブローグ〜幼少期編〜（前書き）

いきなり、EDフラグを叩き折ります。リユゼツランルートが好きな人はシャットダウンするか、電源をお切りください。

プロローグ―幼少期編―

川神市 どこかの河原。

「……」

少女は歩いていた。歩き方は危なっかしく、千鳥足のようにつらふらと。

この少女の名は榊原小雪。むかきはらのこゆき 白い髪と肌に紅い目が特徴的な女の子だ。他にも普通の女の子が持つていないであろう特徴がある。それは全身……服を着ているのでわからないだろうが、無数の傷跡が付けられているのであった。

これは彼女の母親にされたもの。小雪がなにかしたんじゃない、むしろ良い子であつただろう。だつたらなぜか？ただの虐待だ。母親のきまぐれで、殴られ、首をしめられ、ご飯を抜きにされて、刃物で切られたり……等と数々の仕打ちを受けていた。

しかし、小雪は必死に好かれようと努力をしてきたが、それは無意味であまりにも残酷な結果だった。

笑っていたら、殴られる。自分の大好きなマシュマコを上げようとしたら、蹴られる。

彼女が通っている小学校でも、蔑まれていた。小雪に近づくものはばい菌扱いされるといふ、なんとも陰湿で子供っぽい虐めを受けていた。

そんな日々が続いていき、小雪の精神は日に日に削られていった、ある日のこと。

空き地で子供たちが遊んでいた。

楽しそうに。

みんな笑顔で。

そこはとても光に満ちていた。

小雪は原っぱから遊んでいる様子を見ていた。自分も仲間に入れてもらおうと思っていたが、行動には移す事ができなかった。拒絶されるのが怖くて……

数週間が経ち、母親に虐待され、子供たちを見ていた小雪だが、これ以上安息の場所がない状態で生活していくのは自分の心が崩壊する。そう悟った小雪は大好きなマシユマロを握り締めて、彼ら……空き地で遊んでいた子供たちの仲間に入れてもらおうと決心した。

それで、小雪はやたらと気取った男の子に話しかけたのだが……

二ヒルな男の子「悪いな、店員オーバーだ」

呆気なく断られてしまう。

めげずに、何度もマシユマロを握り締めて会いに行くが、断られる。その繰り返し。

完全に拒絶の言葉を投げかけられた小雪はマシユマロを握りしめながら、独り河原を歩いていた（冒頭に戻る）

断られた。もう何回目だかわからないくらいに会いに行ってみたけど、今日も断られた。

ずっとひとりぼっちは辛くて、寂しいから、仲間に入れてもらおうと思ったけど、だめだった。

ぼくの大好きなマシユマ口を上げて、彼からの返事は変わらなかった。

……友達が欲しいよ……。もう一人ぼっちは

小雪「うわっ」

???「あいたっ」

地面を見ながら歩いていたら、誰かが前から来ているのに気が付かず、ぶつかってしまい、ぼくは尻餅を打ってしまった。ぶつかった人に謝ろうと、ぼくは地面に付いたまま、顔を上げた。
そこには

side 榊原小雪 out

side 一条城?

第二の人生をハゲじいさんに与えられてから、落ちている途中に、意識が無くなっていた俺は目を覚ました。この世界で初めて目に移ったものは

女性「見てあなた！この子が目を開いたわよ！！」

男性「おお！なんと凛々しい顔立ちなんだ！決めた！この子の名前は池面にしよう！！」

城「（な、なんじゃこりゃー………！？）」

ほんわかとした女性が俺を抱いていて、とダンディーな男性が俺の顔を覗きこんでいた姿でした。

まさか……赤ちゃんからかよ！？

池面「行つてきまーす」

母親？「行つてらっしゃい。暗くなる前には帰ってくるのよ」

あれから数年が経った……つてこら！！俺の名前は一条城だ！！そんなわけのわからん名前じゃない！！

え？さつきは池面つて名付けられていただろつて？バカやろー……！今も前世も俺は一条城だ！！両親がその名前で呼ぶ時は全てスルーしていたら、名前を城に変えてくれたっての！でも名前の由来が「将来、童話に出てくるようなお城を建てれるように」なんて不純極まりなかったが。

城「はい」

そう。それが正解。母さんに手を振ってから家を飛び出る。この人は一条優姫さん。俺の母親だ。長い黒髪に黒い瞳と、大和撫子みたいな容姿をしている。おっとりした性格で父さん曰く、癒し系らしい。父さんの名前は一条疾風さん。容姿はネギまのタカミチまんま。性格は真反対で、豪快でいつも突拍子のないことを言う人だ。転生先の名字が一条には驚いたが2人共優しくてよい人だ。

俺の身体能力についてだけど、小学生に上がるころに、父さんから趣味の剣道をやらないかと誘われた事がある。道場はなかったので庭でやることになった。父さんの実力は全国大会でベスト4に入ったことがあるらしい。なのに、初めての立会いで園児相手に本気を出すという、なんとも大人気なかったのだが……

勝ってしまった。

園児が大人に。年の差が5倍以上はあるのに。前世の青年の時よりも体が軽く、力が何十倍もあつた。母さんたちがどんな反応を取るか、気になっていたんだが……

優姫「あらあら〜お父さんをやつつけちゃうなんて。城ちゃんはずごいわね〜」

と、全然気にしてもいなく、いつもの雰囲気。少しは疑問に持たないんですか？

父さんかというと……

疾風「ははは。ちょっと油断しちゃったよ。次は本気を出すから覚悟してね？」

再戦を挑んできた。あなた最初から全力で来てませんでしたか？まあ、一度負けたから二度目も勝てるはずがなく……

疾風「は、はははは。また油断しちゃったよ。え？さっきも同じ事言っただけだったって？ゆ、油断の種類が違っただよ！さ、竹刀を構えるんだ！」

油断の種類って……そんなのがあるのか？で、二度あることは三度あるというように……

疾風「や、やるじゃないか……けど、次は……え？もうだるいから諦めるって？なにを言うんだい！勝負はまだまだこれからだよ！！さ、始めようか！！！」

これの永遠のループ。ぶったおしては、復活して、ぶったおしては、復活しての繰り返し。結構本気で叩いているのに、中々気絶しなかった。最後は母さんが止めに入って、なんとか抜け出す事が出来た。父さんは駄々を捏ねまくっていたが、母さんが目にも留まらぬ速さで、父さんの首に手刀を叩き込んで気絶させて、家に引きずり込んでいった。

……普段怒らない人が怒ると怖いって言うのは本当なんだな。俺は母さんを怒らせないように誓った日でもある。

とまあ、こんな感じかな？この後でわかったことなんだが、俺の体内には気が流れているらしく、父さんと上手く扱えるために毎日特訓をした。その成果身体能力も向上し、自分の周りに障壁を作り出せるくらいには成長した。

家は一軒家でそこそこの裕福だし、学校面では成績は優秀だし（素行は酷いが）、友人面も問題ない。今日はその友人たち……風間ファ

ミリーという集団に俺は属している。

昨日までは家族と2週間の長旅をしていて、家を留守にしていたので、遊んでいなかったが、今日からまた遊ぶようになったのだ。

風間ファミリーの人数は女子3人。男子は俺を含めて5人の計7人で活動している。詳しい説明は会ってからでいいか。

俺は旅行土産を片手に、前方を気にせず走っていたため

???「うわっ」

城「あいたっ」

誰かとぶつかってしまった。俺の方は軽く仰け反ったくらいだが、相手の方は尻餅をついていた。

……しかも女の子かよ！新雪を思わせるような肌と髪に……ん？なんかこの子……見た感じだと、酷く衰弱していないか？

女の子「……」

城「すまん。ちょっと俺の不注意だった。大丈夫か？」

どう考えても俺のせいなんだがな。取りあえず女の子に手を差し伸べる。

女の子「……え」

城「ほい、グリーンっと」

掴もうとする気配がなかったたので、俺が一方的に立ち上がらせた。多分……同い年くらいか？けど、学校では見たことがない……。

城「怪我はないか？」

女の子「……………」

無反応。女の子の紅い瞳とは裏腹に、弱弱しい瞳で俺を見つめてくる。

城「……聞こえていますか？」

女の子「……………」

城「あの……」

女の子「……………」

城「もしもし」

女の子「……………」

かめよ……うん。全然反応してくれない。この子の視界には俺が移っていないんだろうか？それとも失明者か？

……んなわけないか。松葉杖も持ってないし。

女の子「あ、あの……」

お、やっと喋ってくれた。小さく聞き取りずらい声のボリュームだったので、耳に神経を集中させ一言一句聞き逃さないようにする。

女の子「マシユマロ……食べる？」

女の子の右手から、握りつぶされ、形が変形していたマシユマロが差し出された。

……なぜにマシユマロ？全く持って脈略がないんだが。

城「……えーっと」

女の子「……」

差し出されたマシユマロを見つめて、ちらつと彼女の顔を窺ってみた。

その瞳は不安で揺れていて

今すぐにでも崩れ落ちそうな、儚いイメージを俺に湧かせてきた。

……

城「ああ……もうござ」

俺の手よりも小さい手の平の上に乗った、マシユマロを取って食べる。長い時間握っていたのか、温かくなっていて、お世辞にも美味しいとは言えない。

女の子「……おいしい？」

城「あーうん。まあまあだったな」

女の子「……」

俺の感想に俯く女の子。え？なに？今の俺が悪いのか！？なんか肩

が震えているし！こんなところで泣くなよ！？あーもう！どうすりゃ……そうだ！

城「ほ、ほらこれ！やるよ！」

お土産として持っていた長方形の箱を開けだして、中に入っていた袋に入ったシュークリームを渡す。旅行の土産がシュークリームっておかしくない？とか思つかもしれないが、父さんが買ったものだから、俺は知らん！！

女の子「くれるの……？」

シュークリームを両手に乗せたまま、顔を上げて虚ろな瞳で俺に聞いている。

城「マシュマロのお礼だ。気にせず食っていいぞ」

マシュマロ一個と200円のシュークリームじゃ、割りにあわないが。

女の子「……はむっ」

薄桃色の小さい口で、シューに噛ぶりつく。

城「美味いか？」

さっき女の子が聞いてきたことを、俺が聞いてみる。

女の子「モグモグっ」

城「慌てて食べるなよ。喉に詰まらせるかもしれないぞ」

女の子「……うん……モグ……うううっ……ひつく……おい……しい」

ちよ、結局泣くんかい！？俺なにか気に触ることもした！？

城「な、なぜ泣く!？」

女の子「ううん……とっても……美味しくて……ひつく……暖かかった……から」

え？このシュークリーム冷蔵庫で冷やしていたやつなんだけど……さっきのマシュマロよりは冷えてるはずだ。

女の子「ぐすっ……誰かから……プレゼントをもらうなんて……はじ……ひつく……めてだから」

泣きながらシュークリームを食べ続ける女の子。もしかして……孤独なのか？やせ細った体。傷は治っているみたいだが、この跡は……虐待でもされていたのか？火傷とかの皮膚はそう簡単には誤魔化すことができないし……。

城「……そうか」

俺は女の子が泣き止み、食べ終えるまで、ずっと頭を撫でていた。

城「いまさらだが、自己紹介がまだだったな。俺は一条城。君の名前は？」

女の子「……榊原小雪」

城「小雪だな。俺のことは好きに呼んでくれ」

小雪「……じょう？」

城「ああ」

小雪「ジヨウ……ジヨウ」

確認するかのように、俺の名前を何度も呟く小雪。

城「よし、これで俺と小雪は友達だな」

小雪の手を空いている手で握る。

小雪「え……？」

城「お互いの名前を呼び合った時から、友達なんだぜ？だから、俺と小雪は友達。嫌か？」

小雪「（ふるふる）嫌じゃ……ない」

首を横に振り、否定する。

城「良かった。これで嫌だなんて言われたら
な、なんでまた泣き出すんだよ!？」

小雪の目から、また大量の涙が地面に零れ落ちていった。

小雪「うれしいの……ずっと……友達がほしかった……から」

やつぱり、今まで独りだっただけ……小雪の親はなにをやっているんだ？こんな状態にまで放っておくなんて……いや、それよりも酷い扱いを受けているのかもしれないな。……一度探りを入れてみるとするか。

城「なら、今日は記念日だな。小雪の友達記念日だ」

小雪「……友達記念日……？」

城「そうだ。今から俺の仲間たちに会いに行こうと思っているんだが……小雪はどうする？」

俺の手を握っている手に力が僅かに籠る。……悩んでいるのか？

城「安心しろ。みんな俺よりもガキだが、仲間想いのいいやつだ。お前を否定するやつはいない」

小雪「ほんとう？」

泣きまわっていたので、瞼が赤くなっている。

城「ああ。だから、もう一步踏み出そうぜ？今の小雪はまだ片足しか踏み出してないんだからな？」

小雪を苛めるやつは俺が成敗してくれる。

小雪「……うん」

城「ほらほら、そんな辛気臭い顔すんな。なにかあっても俺が守ってやるからさ。笑顔で行こうぜ」

笑いかけてやる。少しでも不安が取り除けるように。

小雪「……うん！」

繋がれていない手で、目をごしごしと拭き、初めての笑顔を向けてくる。笑うとかわいいじゃないか（言っておくが俺は（21）ではない）

俺と小雪は仲良く手を繋ぎながら、風間ファミリーがいるであろう、空き地に向かった。

城「とゆーわけで、彼女をファミリーに加えようと城さんは思います」

小雪「……………」

空き地で野球をしていた、みんなを呼び集めて、そう提案する。

いまだに小雪とは手を繋いだままだが、空き地に入ってから小雪の握る力が強くなったのは、よくわからない。

ニヒルな男の子「いや……なんで？」

この場にいる全員が思ったであろうことをファミリー1の切れ者、軍師直枝 大和《なおえ やまと》が俺にではなく、小雪を睨んで言ってきた。大和に睨まれ、小雪の肩がビクンと跳ねる。

城「俺の友達だからだ。文句あるか？」

大和「と、友達？こいつとか？」

城「人を指で指してはいけないぞ。ま、なにか言いたいことがあるなら、遠慮なく言っていーいぞ。聞き入れるかはわからんが」

一応みんなの意見は聞いておく。本当に聞くだけだが。

影の薄い男の子「この子には悪いと思うけど、僕は反対だな。どこ誰かも知らない人はちよつと……」

控え目な女の子「……わ、私も……」

始めに反対意見が出たのは、上から普通より、普通なジミーこと師岡 卓也《もろおか たくや》。ゲームやアニメ、漫画好きなので、なにかと話が合うやつだ。みんなからはモロと呼ばれている。俺はジミーかモロと呼んでいる。

で、下の方は小雪と似た雰囲気を持っている女の子。椎名 京《しーな みやこ》。とにかく人見知りをして、ファミリー以外の連中とは関わろうとしない子だ。

城「ジミー、うるさい。お前はそんな一般的な発言しかないから、いつまで経っても脇役のままなんだぞ？」

モロ「酷いよ！確かに僕はみんなに比べれば特徴がないのかもしれないけど……モブキャラの人よりは影は濃いよ！！」

城「いいか、京？お前はもう少し交友関係を広めていくべきだ。ここが居心地が良いのはわかる。でも、だからと言って、俺たち以外のやつと会話をしないのは、後で大変になるぞ？」

モロ「うわっ！すっごい大胆に無視された！！」

ジミが喧しいが、一旦小雪から手を離して、俺は京を「というか、なにこの京と僕の対応の差！？あまりにも差が激しすぎない！？」説得する。小雪と手を離れた際に、俺が京の前に移動すると同時に、すぐに小雪も俺の背中を追ってきた。

京「……わかった。私はこの子と一緒に遊びたい」

モロ「ええっ！？そんなあっさりと！？」

京は物分りが良くて楽だ。どっかのジミとは大違いだ。

城「京は賛成と……モロはどうなんだ？」

モロ「どうせなにを言っても無駄なんだろうね……僕も賛成でいいよ」

陥落成功。なんだかんだ言ってこいつらは優しいからねえ。

城「モロも賛成……と。それで、一番なにか言いたいのはお前らだろ？大和、岳人？」

一番の難関でもある大和と、やたらと筋肉質な男……島津 岳人《しまづ がくと》の前に立つ。

岳斗「あつたりめーよ。久しぶりに帰ってきたと思ったら、こんな得体もしれないガキを連れてくるな」

城「岳斗、うるさい。お前はいつもそんなガキみたいなことを言っているから、女の子にはモテないし、いつまで経ってもゴリラのまなんだぞ？」

岳人「モテない言うな！てか、誰がゴリラだ！！俺は人間だ！！！」

城「はい、これお土産のフィリピン産のバナナ」

岳人「お、サンキューな」

岳人をからかうために、家から持ってきたバナナをシュークリームの入っている箱から渡して、皮を剥いて食べ始めるDK。

モロ「食べてるよ……本当にゴリラだよ」

バナナを頬張る幼馴染の姿にため息を吐き呆れるモロ。いつか、岳人のことを学会で発表しよう。

城「岳人は賛成でいいよな？」

岳人「おう……なんでもいいぜ」

モロ「餌付けされてるよ!？」

バカの相手は本当に楽だ。これからもバカな岳人でいてくれよ。

城「これで賛成数が3人……と。あ、忘れていたけど、これ沖縄のお土産ね」

モロと京にシュークリームを渡す。

京「ありがとう」

モロ「なんで、沖縄のお土産がシュークリームなのさ……」

それは父さんが独断で決めたからです。

城「さつきから黙ってばっかだが、ワンコと桃先輩はどっち派なんだ？」

ずっと俺たちのやり取りを見ていた、2人の女の子に問いかける。

ワン子? 「あたしはどっちでもいいよー。みんなが賛成ならあたしも賛成。反対ならあたしも反対」

百代? 「私もだ。それよりも城」。あたしと戦おうぜ」

犬の尻尾のようなポニテが軽く揺れて、答える女の子……一子。もとい、ワン子は賛成でも反対でもない派のようだ。こいつは風間ファミリーのいんマスコットキャラ的な存在だ。良く俺に餌

を強請ってくる。個性が強い子である。

同じく、もう1人のショートヘアで気の強そうな目をした女の子……俺の1つ年上の川神^{かわかみ} 百代^{ももよ}先輩もどちでも良い派らしい。こっちもまた一癖ある人で、毎回俺に勝負を吹っかけてきてはやられる父さんみたいに負けず嫌いで何度も再戦してくるが、俺にやられるの繰り返し。モモ先輩は決して弱いわけじゃない。むしろかなり強いのだが、相手が悪い。チート能力の俺にはなすすべがないだけだ。正直言って……戦うのはだるいです。

城「だるいから、嫌だ。はい、シュークリーム」

モモ先輩の挑戦を適当に断り、2人にシュークリームを上げる。

ワン子「わー、ありがとー」

百代「もぐ……こんなんで私を懐柔しようたって……モグ……そうはいかないからな」

食いながら言っても説得力はありません。

城「てことはワン子も、モモ先輩も賛成ってことで……。残ったのは大和だけになったわけだが……」

みんなの視線が一斉に大和に集まる。

大和「……キャップなしで決めていいのかよ」

最後の悪あがきにここにはいない、風間ファミリーのリーダーの名前を挙げる。

城「いいんだよ。キャップがない間は俺がリーダー……俺が正義だ」

大和「それにしてもやり方がすげえ強引だと……いえ、なんでもありません」

城「よろしい」

拳を掲げただけで、平謝りをしてくる。力こそ正義！とまでは言わないが、相手を屈服させるのにはいい手段だ。

城「んじゃ、大和も小雪が加入するのを認めるんだな？」

大和「（……小雪っていうのか）もう決定事項なんだろう？ だったら別にいいさ。キャップがここにいたらすぐにでもOKしそうだし」

「いいぜ！俺はこの風間ファミリーのリーダー風間 翔一《かざま しょういち》だ！今日からお前もファミリーの一員だ！」なんて言うのが目に見えている。

つかさ、わかっていたなら始めから賛成しとけての。だるいだろうが。

城「なんだかんだで、全員賛成か……だつてよ、小雪？」

俺の背中に隠れている小雪を、前に出す。

小雪「え……？」

みんなの好機の視線に戸惑う小雪。俺の顔を見たり、みんなを見たりと忙しい。

城「自己紹介だよ。自己紹介」

小雪「……うん」

こくりと頷き、一歩前に歩み出る。

小雪「さ、榊原小雪ですっ！よ、よろしくおねがいしましゅー！」

噛みまくりだった。小雪は「あうー」白い顔を沸騰したやかんのごとく、真っ赤にして俯いている。

小雪の第一印象はみんなにはどう移ったか？

『あ、あははははははは！』

笑われた。みんな腹を抱えて笑っている。

小雪「ジョウー」

小雪は泣きそうな顔で俺を見てくるが……

城「んな情けない声を出すな。みんなを良く見ろ」

小雪「……ふえ？」

みんなの顔は笑顔で

誰も小雪を拒絶しようとはしない

瞳で見ていた。

小雪「あ……」

ここからは天の声。

ずっと憧れていたものを手に入れることができた小雪は……その場で泣き崩れてしまった。城と新しい仲間が慰めたりとするが、小雪は城の時よりも泣きじゃくっていた。泣き止んだ後はみんなで楽しく、野球をして遊んだ。

この日から榊原小雪は風間ファミリーの一員となり、城とファミリーの皆と幸せな日々を過ごしていく。

そして……ありえはしなかった歯車が、物語として動き出すのであった……

数日後に、小雪が1人で風間ファミリーに入ろうとして、大和が断ったことを知った城が、大和をお仕置きしたのは別の話である。

ブローグ〜幼少期編〜（後書き）

時系列が複雑なので、一子の苗字は出していません。

主人公設定（前書き）

詳しいことはD・C・?の設定で。

主人公設定

一条 城《いちじょう じょう》

基本的な設定はD・C・?通り。

やるきなし、めんどくさがりで、人外な身体能力を持っている。
唯一違うところは『全てを思い通りにできるていどの力』がないこと。

D・C・?よりは少し丸く収まった。

容姿

父母にはまったく似ておらず、髪の色は白銀で瞳のカラーは京と同じ紫。髪型と顔立ちは銀魂の沖田をモデルにしており、目が若干沖田よりつり目。

原作開始時のデータはこんな感じ

身長 177センチ

体重 66キロ

誕生日 6月6日

所属クラス 2-F

好きなもの マシユマロ カレー 炭酸飲料

嫌いなもの 料理という名の暗黒物質 めんどいこと いじめっ子

トランプ等のカードゲーム（運がないので常に負けるから） ジ
ヤンケン（勝率は5パーセント以下）

趣味 読書（主に漫画） ゲーム全般

能力

筋力	E	X
体力	E	X
俊敏	E	X
魔力	A	+
幸運	-	F

魔力が足りればあらゆる世界の技が使えることも可。

ブローグ〜学生編〜（前書き）

長い！説明文が多い！そして小雪のキャラがむずい！

プロローグ〜学生編〜

4月18日 土曜日 一条家、城の部屋。

城「zzzzzzzz」

????「城〜。起きろ〜、朝〜、新学期だよ〜」

誰かが体を揺さぶって、俺の睡眠を邪魔する……嫌だあ〜〜〜。
この温かい羽毛のような感触から離れるのはいやだ〜〜。なんで、
土曜なのに学校があんだよ〜〜〜マジだりいよ〜〜〜さぼりたい
〜〜〜

城「あと……30分」

????「う〜〜〜。早く起きないと、すごいことするぞー」

バシバシと布団越しに叩いて警告をしてくる。凄い事〜〜?んな
ことより、俺は睡眠を優先します〜〜〜zzzzz

????「よーしっ……えいつ!」

ボスッ!

城「ごふあ!」

突如腹の辺りに、なにかの衝撃がやってきた。ぐふう……これは腹
に乗っかってきやがったな!

城「お、重い……」

???「む！重いつて言ったなー！それ、それっ」

ボスッ、ボスッ、

城「ぐ、がはっ、と、飛び跳ねるな……」

何度もなんかの柔らかいものが、腹に衝撃としてくる。

???「だったら、起きろー。朝だぞー」

城「わかった、わかった」

上半身を起き上がらせると、目の前には我が幼馴染の顔が、笑顔で俺を見ていた。

城「起こすときは、体に乗るなっていつも言っているだろ……」

案の定、俺の腹をイス代わりにして座ってやがった。

???「だって、こうしないと起きないじゃん」

所在なげに足をぶらぶらとさせて、悪びもせずに答えてきた。

城「はあ……まあいいや。取りあえず、そこからどいてくれ」

???「へーい」

素直に聞いてくれ、ピヨーンと飛び上がって、着地する際に両手を

広げてポーズを決めていた。

俺はベットから抜け出し、幼馴染の前に立ち

城「おはようユキ」

小雪「おっはよー城」

小雪と朝の挨拶を済ませた。

ユキが風間ファミリーのメンバーとなってから数年が過ぎ、俺たちは高校2年生までに上がった。それまでには色んなことがあった。母親に虐待を受けていたユキをファミリー全員で、家に突撃して現場を激写する、母親を殴りまくるモモ先輩。川神院……ワン子とモモ先輩の実家に通報し、母親逮捕。ユキはそのまま保護されて新しい、保護者が引き取ってくれることになった（その時の苗字も榊原という、偶然があった）

引きとってくれた人たちは、初老の夫婦だった。お二方はとても優しく、穏やかな人たちで安心して小雪を育ててくれるであろう人たちだった。

そして、ユキがいじめられていること小耳に挟んだ俺は、ユキの通っている学校に乗り込んで苛めているやつらをしょけ　トラ　ウマになるくらいの苦痛を味あわせてやった。ユキは「城とみんな

がいてくれるから、別にいいよ」と大した興味もなく言ってきたが、俺は止められなかった。

で、そのことを榊原老夫婦が知った翌日に、俺とファミリーが通っている学校に転校してきたのは……さすがに驚いたよなあ……俺のクラスに。自己紹介をする前にユキが俺を見つけると否や、すぐさまに抱きついてきて、キャップたちにかかわれたのも今となっちゃ、良い思い出か。

他にも色々あったな。京もいじめられていて、みんなで苛めたやつらをリンチにしたり。みんなで夏祭りに遊びに行ったり、みんなで町内『子供喉自慢大会』に参加したり、楽しかったことが沢山あったな。殆どがファミリー絡みだけだな。

小雪「ムグムグ……ん？どうしたの城？さつきから遠い目をして」

俺が作った朝食を食べながら、ユキが聞いてきた。小雪が住んでいる家はここから、数十分ほど歩いた距離の一条家より、ちょっと小さい一軒家だ。それなのになぜ朝食と一緒に食べているのかって？基本、ユキが俺んちの合鍵を使って、俺を起こしにくる時間は、朝のHRが始まる時間の2時間前なのだ。そんな朝早くにユキが飯を食べる事も、作る事もなく（てか、ユキに作らせたらダメ絶対）俺に作らせ、一緒に食べる……これが学校がある日の日常だ。

城「ちょっと過去のことを思い出していたんだ」

小雪「あ、わかった」。読者のみんなに説明を「危険なメタ発言はすんな！！」「うえーい」

な、なんてことを言うんだ……今日までずっと一緒にいたが、ユキの性格は未だに掴めない……というか、行動が読めない。親父みた

いに突拍子すぎるのだ。

その本人は「城君！海外が……一攫千金の匂いが僕を呼んでいる！だから今日から1人暮らしをしてくれ！」と中学2年のころにそんな、電話一本で両親2人は海外へと飛びだつたのだ。……ユキに合鍵を渡して。一応仕送りは送ってきているのだが、如何せん、食費は俺の分だけなので小雪の分は含まれていないため、金が足りない。時々俺は川神院でバイトをしているんだけどな。門下生の相手と、ワン子とモモ先輩の相手をするという。ハードな内容だが、時給もかなり高いので俺としてもありがたいのだ。月に3回やるだけで、2週間分の生活費が確保できるしな。

城「ほら、口元にケチャップが付いているぞ」

小雪「んんん？どこんんん？」

城「舌で拭き取ろうとするな。ペちゃんかお前は」

テーブルに置いてある布巾で口元を拭いてやる。体つきは子供の頃には想像できないくらいに成長したが（どこがとは言わない）精神はまだ幼いところがあるんだよな。

城「ほら、取れたぞ」

小雪「さんきゅー」

お礼を言つて、食べるのを再会する。

城「つて、また付いてるじゃねえか！」

小雪「とつてん」

城「自分で拭きなさい！」

城「じゃー、行くか」

小雪「うん」

皿を小雪と一緒に洗って、川神学園……俺たちが通っている学園へ
に行く準備をして、小雪と一緒に玄関を出る。

城「いつてきます」

小雪「まーす」

誰もいない家だが、あいさつはちゃんとする。これも習慣付いたせ
いだろうな。意識しなくても無意識に口が動く。

小雪「あ、ちようちよ」

城「こらこら、どこに行くつもりだ」

宙を舞っているモンシロチョウを追いかけようとする小雪を引き止

める。

小雪「あ、犬だ」

城「こらこら、なにをしようとしているんだ」

近寄ってきた野良犬に、油性ペンを鞆から取り出し落書きしようとしたユキを窘める。^{たしな}通学途中にはユキがあっちへふらふら。こっちへふらふらとさ迷うから、つい目を離してしまうとどっかへ消えてしまうので、注意が必要なんだよな。ま、基本視界に入っていれば問題ないが。

小雪「犬の額に肉って書こうかなって」

城「やめんか!!」

見る、今の俺たちのやり取りに犬が低く唸って威嚇してんじゃねーか。

小雪「がうー」

犬の真似をして、両者睨みあう。……本当になにをやってるんだか。

城「置いてくぞー」

小雪「あ、まってよー」

俺が置いていこうとすると、今まで興味を持っていたものに、興味を失って追いかけてくる。

城「まったく、道草を食うなら放課後にしておけつての」

ぴよこんと隣に並んだユキにデコピンをくらわす。

小雪「あうっ。ぼーりよくはんたーい！」

額を押さえて、俺をジト目で見てくる。

こんなやり取りをしながら、俺たちはある川原までやってきた。

これといって形容詞が見つからない男「あ、来たみたいだね」

何年経つても、永遠の脇役である師岡卓也が草むらを横切ってきた俺たちに、気づいたみたいだ。

小雪「おっはよーモロー」

城「おはよう。今日もモロは影が薄いな」

卓也「人の顔を見るなり、傷つくことを言わないでよ！」

小雪「みんなもおっはよー」

城「おはよう。今日からまたかつたるい学校生活が始まるな」

卓也「また無視!？」

他の集団にも挨拶をする。その相手とは

青髪の女の子「おはよう2人共。大和付き合っつて」

モヤシ風な男の子「おはよう、小雪、城。お友達で」

ゴリラ「おう、おはよーさん。今日の俺様は一段と決まってい
ないか？」

挨拶の中に告白を交えてるのは椎名京。昔と比べれば自身を曝け出すようになった。

……ファミリーのメンバーにだけ。

その告白を受けて断つたのは直江大和。悪知恵が働く我らが誇る軍師様だ。小学校の頃に、京がいじめられていたのを大和が率先して助けたら……惚れられた。ということだ。

ポージングをして、鍛えに鍛えまくった胸板を見せ付けてくる、人間の進化前のゴリラは、島津 岳人。その巨漢の体から繰り出されるタックルをくらったものは、ひとたまりも無いくらいの大男だ。
知能もゴリラ並つまりバカである。

小雪「京また振られちゃったね。マシユマロ食べる？」

京「あれは大和の照れ隠しなんだよ。ひとつ貰うねユキ（パッパッ）」

大和「照れても、隠してもいないっての（うげ……マシユマロの色が雪山から火山に変色した……）」

高校生になってもユキのマシユマロ好きは健在だ。なんて言う俺もユキの影響で結構好きなんだが。

京は常に携帯している七味唐辛子をマシユマロにかけて食べていた（これを京カスタムと言う。ここテストに出るぞー。……出ないけ

ど）辛党なんてレベルじゃないよなあ。

岳人「それで、どうだ城、ユキ。今日の俺様は？（キラーン）」

さつきから岳人がポーズジグリングしまくって、うざい。ゴリラが歯を光らせてもきもいだけだったの。

小雪「ふっー」

城「そうだな……例えるなら、ニコ動で登場してくる兄貴みたいに決まっていると、城さんは思いますぜ？」

小雪はマシユマロを食べながら適当に答え、俺も適当な出任せを言う。

岳人「へ、ありがとよ。城」

卓也「つまりそれは暑苦しい男ってことなんじゃ……」

モロは突っ込み役なので、俺の真意がわかったみたいだが。岳人はバカなので満足気だった。

6人で世間話や趣味の話をして歩き始める。

俺たちは基本川原で合流して、川神学園へと向かう。いつもならあと3人いるはずなのだが、一人は放浪癖があり、昨日から埼玉に遊びに行った。もう2人は朝から修行をしているんだと思う。変態橋に着いたから、そろそろ合流するんだと思うんだけどな。

ちなみに変態橋は名前ではない。本当は多馬大橋と言ったが、この橋には

猿のような男「なあなあ、見ろよこの写真集に載ってる女の子。まじかわいくね？やべえ、勃つてきやがった！」

太ったキモヲタ「はあはあ……あ、アミたんか。か、かわいいんだなー。オイラの嫁なんだなー」

工口本を堂々と歩きながら読んでいる男どもや

イヤホンを片耳につけた女の子「……9回裏……満塁のサヨナラ
の場面でバッターは村田。最低でも同点には……！」

浴衣を着た女子「ほほほほ。庶民はいつ見ても貧相じゃのお」

奇抜な生徒たちが次々と登校するからだ。

犬みたいな女の子「みんな――！おはよ――！」

女王のオーラを醸し出している女性「よしワン子。どっちがあいつらの元へ先につけるか競争だ」

みんなで一斉に声の発信源の方へ振り向くと、砂煙を出しながら女2人がこつちへ走って来ていた。

— — — — —

≡≡

!!!!

女王のオーラを醸し出している女性「ははははは。私の勝ちだなー」

犬みたいな女の子「ううつ……お姉さま……早い！」

物凄いスピードで特攻してきた2人は余裕で俺たちを通り越し、ブレーキをかけて、息を乱さずに立っていた。
胴衣姿で。

大和「おはよう。ワン子、姉さん。それよりも人の迷惑ってこと知ってる？」

一子「え、なにが？」

百代「迷惑？なんだそれ食べるのか？」

大和の言っている事が理解していない、犬っころは川神一子。猪突猛进な性格で、風間ファミリーの切り込み隊長。孤児院で育っていたことがあり旧姓は岡本だったのだが、色々あって川神家に引き取られ川神一子となった。名前と犬みたいなやつなので、みんなからはワン子と呼ばれている。運動面に関しては言う事はないんだが、勉強面では岳人と同じくらいにバカなんだよなあ。

悪気100パーセントで返しているのは川神百代。俺たちより1つ年上の先輩でワン子の姉的存在。唯我独尊、天下無双の言葉が良く似合う人で、その強さはまさに獣。俺と戦って勝ったことはないが、川神市。県外にもモモ先輩の名前は最強として知れ渡っている。俺？あんまり戦わないからそれほど知れ渡ってはいない。
……モモ先輩よりはね。

城「はよー。朝から元気だな」

一子「もちろんよ！アタシから元気を取ったらなにが残るっていう

のよ」

城＆大和＆卓也＆岳人＆京「……バカだけだな（だね）」……」

男性陣の声が揃う。

一子「ひどっ！ていうか、岳人には言われたくないわよ！」

どっちもバカだと思うが。

岳人「なんだと？俺のどこがバカだっていうんだ」

城「存在自体がじゃね？」

岳人「なんでお前が答えるんだよ！！っ！か存在まで否定すんのかよ！！！」

百代「あー、朝からうるさいぞ。岳人」

モモ先輩の手加減ないボディーブローが岳人の腹にめり込む。

岳人「な……なんで俺がこんなめに……」

膝から崩れ落ちる。

百代「今日是对戦相手がなくて、むしゃくしゃしていたんだ」

ただの八つ当たりだった。

京「ふーん。珍しいね」

小雪「そんなときはマシユマロを食べよう」

ユキがワン子とモモ先輩にマシユマロを配る。

一子「ありがとユキ。でも甘いものより、肉が食べたいわー」

百代「これはこれで美味いんだけどな……大和、放課後になんか奢ってくれ」

文句は言いつつも食べるのかよ。モモ先輩は大和に集ろうと、首筋に抱きつく。

大和「ちよつ、姉さん！恥ずかしいからやめてよ！！」

おい、鼻の下が伸びてんぞー。

京「わ、私の大和が……知らない女に誘惑されてる！！」

卓也「私のつて、まだ付き合っていないじゃん！それに、モモ先輩は思いつきり知り合いでしょー！」

京「ナイス突っ込み」

城「さすがモロ。見事な二連続ツッコミだな」

京は片手にプラカードを持ち、10点満点を出す。俺は座布団を一枚差し出す。

卓也「嬉しくないんだけど……それに2人共どこから出したのさ……」

…」

それは秘密。

小雪「それよりも、早く学校に行こうよ。置いていくよ」

ユキがくると回りながら、みんなより先に進んでいく。なんか、朝から妙に機嫌が良いな？

大和「ユキのやつ、嬉しそうだな」

岳人「いててて……だな。あの変人クラスとおさらばできるのが嬉しいんじゃない？」

百代「私は違うと思うがな。ユキはそれなりにSクラスでは楽しくやっていただろ」

京「やっぱり、城と同じクラスになれたのが嬉しいんだと思うよ」

モロ「毎日昼休みに、僕たちのところに遊びに来ていたもんね」

一子「?????どういうことかしら？」

好き勝手に言ってくれてるね。ワン子は除外するが。

去年……一年生の頃はモモ先輩とユキ以外はみんなFクラスだった。モモ先輩は一学年上なので当たり前だが、ユキは成績優秀者なのでSクラス所属だったのだ。考えられる理由としては入学試験の時にユキは上位入賞者に入るほどの点数を取っただからと思う（俺と京はそのことを噂で聞いた事があるので、適当に手を抜いた）。

二年生以降からなら、定期試験で50以下の人はSクラスから切り

落とされるのだが、一年生にはそのシステムは採用されていないのだ。そのせいでユキはSクラスに残る事しかできず、自分だけみんなとは違うクラスだなんて―ずるいよ―……なんてことを言って、ほぼ毎日俺に不満をぶつけまくっていた。

で、二年生に上がった今は一年の最後の期末テストでユキは適当な点数を取ったので、Sクラスから落ちて他のクラスになることになったのだが……これも運命なのか、自宅にクラス編成の髪が届き、俺たちはみんなFクラスの欄に載っていたのだ。

学園長が仕組んだ気がするの俺だけなのだろうか……

城「まあ、ユキが嬉しけりやなんでもいいか……」

京「それは兄代わりとしての気持ち？」

小さく呟いたのだが、近くにいた京には聞こえたようだ。真剣な目で聞いてくるのが、妙に気になる。

城「？そうだが」

俺は何気なく答えただけなんだが……

京「……ユキ。相手は大和と同じくらい手強いよ……」

京は遠くにいるユキに同情の視線を送っていた。

……わけがわからん。まじ、わからん。

始業式も終わり、授業も無いのですぐに帰宅の時間になりました。カットしすぎだつて？なこと言つても特に見せるほどの内容じゃなかったからな。だつて、クラスメイトはユキ以外はみんな一緒に顔見知りだし、担任の先生は……小島^{こじま うめこ} 梅子先生と言つて、美人で、鞭を持ち歩いている。しかも、遅刻していた生徒には鞭でを振るつて、体罰ありの軍隊みたいな人だ。

他には……あ、始業式なのに学園長が不在だつたつてことだ。……どうでもいいな。

帰りのHRが終わつて、みんなの今日の予定を聞いてみたら、大和は校内の人と親交を深めるためにカラオケに行くらしい。岳人はジムに。モロは新作のゲームを買いに、ゲーーズに。京は参考書を買いに本屋に。一子は俺が教えた必殺技を習得するために修行。モモ先輩は他学年の女の子をはべらかして、喫茶店でお茶すると言っていた。俺とユキは特になにもないので、すぐに帰宅する事にして、俺んちでユキとのんびり過ごすことにした。

城「靴掃いたかー？」

小雪「うん」

下駄箱でローファーに履き替え、鞆を右肩に担いでユキと一緒に校内を出る。

小雪「ねー、城」

城「どうした？」

小雪「貂蝉ちようせん って、実はマッチョだったんだね」

城「……本当にどうした？」

なんで、貂蝉「マッチョに結びつくんだ？貂蝉といえば古代中国四大美女の1人じゃなかったけ？」かどうして唐突に貂蝉なんて名前が出てくるんだよ。

小雪「HRが終わったあとにね、モロが「真恋 無双に出てくる貂蝉は、岳人そっくりだよな」って言ってたから」

顔の影を強くして、モロの声真似をするユキ。

……モロに対するイメージって、幽霊なのか？岳人がガチムチゴリラだってことは、ユキも思っていたんだな。……まあ、ユキはこうみえてもかなり毒舌だからな。岳人本人に向かって「ドンキ……餌の時間だよ……」なんて言って、バナナを目の前でプラプラとさせて挑発しているしな（怒った岳人はユキを追いかけて回したが、ユキはワン子と同じくらい身体能力が高いので、からかいながらも逃げていた）

城「いいか、ユキ。モロが言っていることの大半は、あいつの妄想なんだ。だから、あんまり真に受けるなよ？」

立ち止まって、俺はユキの右肩に手を置いて、諭す。
嘘は言っていない……ような気がする。

小雪「うん、わかったー。これからはモロの言う事は信じないことにするー」

首を傾け笑顔で、俺の言葉を鵜呑みにした。

……モロになんて言えばいいんだろ……まあいいか。だるいし。

城「……ん？」

校門の辺りから、俺とユキを見てるやつらがいるな。俺の視力にか
ければ望遠鏡じゃなきゃ、見えないところまでも俺には見えるんだ
ぜ！

……お、あいつらは……。

城「ユキ。あの2人はお前の知り合いじゃないか？」

小雪「ん？……あつ！トーマに準だー！やつほーー！」

手をぶんぶんと振って、ここにいることをアピールするユキ。校門
の2人は、1人は笑顔を崩さずに、もう1人は呆れながら俺たちの
ところに向かってきた。

眼鏡をかけた美形の男「こんにちはユキ。久しぶりですね」

ハゲ「今日から別々のクラスだもんなあ。元気にしてたか？」

小雪「もっちゃん！元気はつらつー！ー！」

おいユキ。右手に持っているリポタンはどこから出した。手を後
ろに回したらと思っただら、いきなりビンを持っているんだもんな……

ハゲ「元気があるのはわかったから、そのリポビタンはしまいなさ
い！メーカーさんに訴えられるぞ！」

小雪「飲んでからー」

お、モロにも負けなくらいの突っ込みだ。こいつも地味キャラか？

ハゲ「なああんた。今失礼なことを思ってたか？」

城「気のせいだ」

ハゲの癖に勘がいいな。いや、ハゲだからか？悟りでも開いているのか、人の心が読めるとか……

眼鏡をかけた美形の男「こうやって、立会わせて話すのは初めてですね。一条城君」

ハゲ「俺は時々Fクラスに行ってたから、知ってると思うが。会話はしたことないけどな」

俺から見て、左から順にユキ、イケメン、ハゲ。の並びで俺に話しかけてきた。ユキはリ ビタンを飲んでいる。

城「だな。ユキから2人のことは良く聞いているぜ。眼鏡のアンタは、葵冬馬。エレガンテ・クアットロの1人で。女にモテモテで、BLだとな。そしてそっちのハゲは、井上準。ハゲでロリコンでハゲで、犯罪者予備軍でハゲでハゲだとな」

ハゲ「ハゲって何回言ってるんだよ！他に思いつくことがないのかよ！？」

葵冬馬。一年でも2年生でもS組み所属。学年一の秀才で、学園一

のプレイボーイ（バイでもある）川神市で一番規模の大きい病院：『葵紋病院』の跡取り息子だったのだが、二月前に不正が発覚し、自身の父親、院長が逮捕され。今でも色々といざこざがあるとか。

こっちのハゲで突っ込み上手のハゲは井上準。同じくS組み所属。葵とは小さい頃からの親友で、親の繋がりもある。つまり、井上の両親も地位が高くて不正に関わっていたことで、逮捕された。今じやどつかのマンションで2人で暮らしてるとか。こいつの肩書きは『神なるロリコン』として有名。一年の時に俺たちのクラス……F組みにロリ委員長がいるので、ユキと一緒に何度も拝みに来ていた。いつ逮捕されてもおかしくないと俺は思う。昼休みには校内放送のモモ先輩のパーソナリティを務めてもいる。万能型のハゲである。ちなみにエレガンテ・クアットロとは、川神学園に在籍しているイケメン4人のことである。その1人に葵。風間ファミリーのリーダー、風間翔一。俺のクラスメイトで友人の（相手は友達と思ってないかもしれないが）源 みなもとただかつ 忠勝通称ゲンさん。あと1人は………多分3年の先輩だったはず。

葵「私のことを城さんに知っていただけているとは、光栄です。ユキからは毎日あなたのことを聞かされていましたから」

城「なんて言ってた？」

ハゲ「ぼくと会ってから『だるい』と言った回数が10万回を越した、怠け者だとか。不幸の神様に取り付かれているくらいの、凄くない不運の持ち主だとか」

城「悪いことを言う口はこの口か？」

リポ タンを飲み終えて、マシユマロの入った菓子製品の袋を片手

に、マシユマロを食べているユキの頬を両手で引つ張る。

小雪「い、いひゃいよ~~~~」

涙目で俺に抗議の声を上げるユキ。ほっぺの感触がマシユマロみたいで面白い。毎日マシユマロを食ってるからか？

葵「……でも、とても優しくて頼りになると。最後には決まって言うんですよ

葵が俺の耳元で囁いてくる。

思わず、両手を離してしまう。

小雪「うっー……ほっぺがいたいよ」

俺に引つ張られた頬をさする。

小雪「……城？なんか顔が真っ赤だよ？」

城「はっ！？べ、別に嬉しくもなんともないんだからね！！！」

ユキがそんなに俺のことを信頼していたことに、照れてしまったことなんか、ないんだからな！！勘違いするなよ！！

葵「おやおや、城さんは初心なんですネ」

準「ツンデレだな」

小雪「おー、これがツンデレ」

城「ええい、違うつての！」

ツンデレはゲンさんで十分だ！！

城「んなことより！お前らはユキを待っていたのか？校門でなにもしないで、立ちっしててるやつの用はそれぐらいしか思いつかないんだが」

話題を強制的に変える。その間に俺は心を落ち着かせる。

葵「用という程ではありませんよ。ユキと少し話がしたかっただけですから」

ハゲ「話を逸らしたな……。俺はお前さんと一度話してみたかったからな」

ふむ……。葵に、ハゲか。俺もこの2人とはもつと話してみたいな。ユキが積極的に友人を作ることには少ないからな。

小雪「城ー。おなかすいたー」

俺の袖をぐいぐいと引っ張って、駄々をこねるユキ。携帯のディスプレイで時間を確認すると、もうすぐ昼飯には良い時間だ。

城「わかった、わかった。俺が家でなんか作ってやるから、そのマシユマロで我慢しとけ」

小雪「うえーい」

もぐもぐとマシユマロを食べるユキ。俺が口を開くと、中に1つほ

うり込んでくれた。

葵「仲がよろしいですね」

城「付き合い長いからな。……そだ、お前らこの後暇か？」

ハゲ「俺は暇だが……若は？」

葵「私も今日は特に予定はありませんが……」

2人ともフリーみたいだな。ユキに目配せをすると、俺の意図が伝わったのか、こつくりと頷いた。

城「なら、俺の家で飯を食ってかないか？」

ハゲ「……いいのか？」

小雪「遠慮なんてするなよ！。ハゲの癖に。城の作るごはんはおいしいんだぞー」

ユキはハゲの後ろに回りこんで、その輝かしい頭部をペシペシと叩く。

ハゲ「ハゲは関係ないでしょ。それに人の頭は叩かない」

小雪「うーん、どっかに撥はちないかな」

ハゲ「そんなものは探さない！」

辺りを見回すユキに、ハゲが止める。立ち位置がモロだなやっぱ。

葵「……よろしいのですか？」

少し影が差した表情で、んなことを言ってきた。

城「ああ。金なんて取らないから安心しろよ？」

片目をつむり、ウインクする。

ハゲ「知り合って間もないのに、他所様を家に上げていいのか？」

城「お前らはユキの友達なんだろう？ユキが選んだやつなら、根は良いやつだろうしな。……言つとくが、親のことは気にすんなよ？そんなことで俺は友人は選ばないしな」

葵＆ハゲ「……！」

驚きの表情を浮かべる。葵は少しわかりづらいが、動揺しているようにも見える。

ユキ「そうだー。気にすんなー」

いつもの調子でユキも俺の言葉に同調する。

ハゲ「……ユキが懐くのもわかる気がするな」

葵「そうですね……城さん。よろしければ私達と友人になってくれませんか？」

これまたSクラスの人とは思えない発言だな。

城「ふっ……俺は家に他人なんかは呼ばないぞ？」

葵「……一本取られましたね。これからよろしくお願いします。城君」

ハゲ「よろしく頼むぜ。城」

2人から手を差し出され、握手を求められる。

城「ああ。よろしくな。冬馬、ハゲ」

右手は冬馬の右手を、左手は準の左手を握った（左手の握手は悪い意味の方だが、今回ばかりはしゃーないだろ）

小雪「ぼくも、ぼくもー」

ユキが下から俺の前に、にゅっと飛び出てきて握手している手に、自分の手を載せる。

冬馬「（城君ですか……とても興味深い人ですね）」

準「なんで若は名前で、俺はハゲなんだよー!!」

城「それはお前がハゲだからだ」

小雪「ハゲだからだー」

準「そのまんまじゃねえか！」

こうして、俺たちは友達になった。

城「んじゃ、適当にユキと寛いでいてくれ」

リビングに鞆を放り投げて、台所に立つ。

準「と言われてもな……料理を作ってもらっておいで、それは悪い気が」

冬馬「ユキ、これはなんという木なんですか？」

小雪「観葉植物だってさー。少しでも運気を上げるためって、城が言ってたよ」

準「ユキはともかく、若は遠慮がないな……」

城「手伝ってもらう時は俺が呼ぶから、それまではユキと遊んでやつておいでくれ」

冷蔵庫の中を漁りながら、リビングでなにかやっているであろう三人に声を投げかける。さて、なにを作るのか……。あるのは、たまねぎ、にんじん、じゃがいも、豆腐、魚……。カレールーもあること

だし、カレーにするか。お手軽、美味しい、早い。の3拍子揃った料理だからな。

城「始めるとしますか」

腕を巻くつて、俺は3人のために美味しいものを食わせようと、気合をいれた。

小雪「トーマー、準ー、これであそぼー」

準「ん？それは……トランプか？」

小雪「そだよー。城お手製のトランプ」

冬馬「へえ……面白そうですね」

準「あいつが作ったトランプか……持っているだけで不幸になりそうだな」

俺に聞こえないとでも思ったら大間違いだぞ。ハゲめ……てめえのカレーには生肉ぶち込むぞ？

小雪「最初は婆抜きやろー」

冬馬「いいですよ」

準「俺もいいぞ」

小雪「それじゃあ、ぼくが切るね。シャッフル、シャッフル」

シュバババババ　　ポロツ（切ってる時に一枚だけ飛び、床に表側で落ちる）

小雪「あ、失敗しちゃった」

準「手作りだったって、なにがオリジナルなのかわからな
ん？この絵柄のやつは確か……」

冬馬「F組の方ですね。この女性は川神一子さんだったはず」

小雪「そだよ。エース（1）だからワン子。数字の番号によって、
みんな絵柄が違っただよ」

準「何気にクオリティが高いな。どうやって作ったんだ？」

城「あー、それはな、パソコンでみんなを書いたのは俺だが、カー
ドは知り合いの業者に作ってもらった」

玉ねぎを切る手は休まずに、準の疑問に若干大きめの声で答える。
二次元風に書いてみたんだよな。涼宮ハ　ヒで例えるなら、ハル
ちゃん。灼眼のシ　ナだと、シャ　たん
風に。

それにしても……涙が……。たしかたまねぎにはアシルプロピオン
つつー成分が含まれているせいで、鼻や目を刺激して涙がでるんだ
よな……そんな成分いらんっての。ポケ　ンのモン　ターボール
の親戚のプレ　アボールと同じくらいいらんよ。あれ、2000
円でモ　スターボールと性能変わらないじゃん。

冬馬「ユキ？ちょっとトランプを、見せてくれませんか？」

小雪「ほいつ」

準「うーむ……愛しのFクラスの委員長はないのだろうか」

いねえよ。このロリコン野郎が。ポリスマンに突き出すぞ？

小雪「いないよ」。このトランプは風間ファミリーのみんながベースだもん」

冬馬「それだと、余ってしまいませんか？ファミリーの人数は9人だったはず。ジョーカーを合わせても4枚はあまるはずですが」

小雪「ううん。今は3枚だよ。忠勝が入っているからね」

準「忠勝……お、こいつのことか」

小雪「友達だからね。特別に城が作ってあげたんだよ」

冬馬「……そうなんですか。……あの城k「みなまで言うな。ちゃんと2人の分は作ろうと考えていたからな」……ありがとうございませす。とても嬉しいです」

準「自分が絵柄になったトランプか。噂には聞いていたんだが、本当になんでもできるんだな……しかも、マークごとにポーズまで違うのか」

ジョーカーの人意外は4つ格好やポーズが違う。8のユキはスペードだと、ブルマを着て回し蹴りを放っているユキ。ハートは私服姿

で座って、マシュマロを食べている。クローバーでは趣味の紙芝居をカメラ目線で読んでいる。ダイヤは学生服で机に突っ伏して寝ている。

とまあ、こんな感じにスペードはその人の戦闘スタイルを主に。ハートでは日常生活。クローバーは趣味。ダイヤは学生生活の様子をモチーフにして俺は考えている。本人たちに見せたときに、嬉しそうにしているやつもいれば、いちゃもんをつけてくるやつもいる（主にモモ先輩と岳人）

小雪「それじゃあ、ババ抜きやろー。配るのは一番髪の毛が薄い人だからね」

冬馬「では、準。お願いしますよ」

準「どんな決め方だよ……まあ、別にいいが」

5分後

小雪「よーしっ、揃った!!」

準「ん、なにがだ？手札は五枚だから上がることはできないぞ」

小雪「みてみてー、フルハウス」

冬馬「3のスリーカードに4とジョーカー。凄いですねユキ。私なんて、ワンペアですから私の負けですね」

小雪「勝利」

準「いやいやいや、おかしいだろ！これババ抜きだからね！？同じ数字のカードはちゃんと捨てて置けよ！！」

一時間後

冬馬「8でやぎって、Qで上がりです。また私が大富豪ですね」

小雪「トーマの出したカードは墓地に送られるから、ぼくはここでジョーカーのキャップを召喚！」

準「ぐはっ！ここ確かよ！！」

小雪「またぼくのターンだね。岳人を3人しょくか〜ん（岳人の数字は？）」

準「ば…パス」

小雪「Kの城で準にダイレクトアタックー」

準「ちくしよおおおおおおお！！！！なんで一回も勝てねえんだよおおおお！！！！」

小雪「これで準は26連敗〜」

冬馬「ババ抜き、7並べ、ポーカー、真剣衰弱、大富豪。運に左右されるゲームにも関わらず準の勝率は0パーセント。これはこれで凄いですね」

準「まさか……城の家に住み着いている不幸の神が、俺にもとりつかれたのか!？」

城「アホなこと言ってんじゃねーよハゲ」

後ろから、準の象徴であるツルピカスキンヘッドにおたまで軽く叩く。

俺の不運は生まれつき……恐らくあのヲタ神が面白がって、不幸体質にしたに違いない。前世ではそこまで不幸な目にはあつてないからな。

冬馬「先程から良い香りがここまで漂ってきているのですが……完成したのですか？」

城「ああ。俺特製のカレーだ」

小雪「やつほーい。城のスペシャルカレーだ」

ぴょんぴょんと嬉しそうに跳ねまくるユキ。

食べる前だというのに、嬉しいことを言ってくれるじゃないか。

城「つーわけで、食いたいやつは皿を出してくれ」

準「あててて……髪の毛がないんだから、軽くでもおたまなんかで叩かないでくれ。もしもタンコブができれば、委員長に顔向けができなくなるじゃないか」

城「顔を原形が留めてないくらいに殴ってやるつか？」

おたまを準の顎に突き付け、笑顔で威圧した。

準「城……俺はこの闘いが終わったら……委員長を愛でに行くんだ」

城「勝手に行つてろ」

ハゲの額におたまの取っ手の部分を前にし、投げ刺した。

城以外「……いただきます」「」

城「召し上がってくれ」

ちゃんと手を合わせる。かの偉人『小野小町』は言いました「食事のマナーを守れないやつに、飯を食う資格はない！」と。

準「言つてねーよ。小町のキャラじゃないだろ」

城「さすがは僧を目指していることだけはあるな……俺の思考を読むとは」

井上準……恐ろしい奴……！

準「目指してねーよ……お前が声に出してただけだったの……！」

む……気づかなかった。これからは注意して話さないと。

冬馬「そんなことよりも準。あなたも早く食べたらどうですか？このカレー、一流シェフが作るカレーよりも美味しいですよ」

穏やかな表情で、準に告げる。

大げさな表現ではあるが、作った身としては最高の褒め言葉だ。味付けはいつも通りにしてみたんだが、冬馬には好評のようだ。

準「それもそうだな……ではまず一口……ング」

スプーンですくい、口の中に運んで租借する。

準「にんじんは甘くやわらかく、じゃがいもはほっくりと形を留め、トロトロに煮込まれたたまねぎが肉のジューシーさをいっそうに引き立てている……」

お前はどこぞの料理評論家かよ。でる小説間違ってたんだろ。美味しんぼの世界に行ったらどうだ？

準「んだが」

ん？準のやつがスプーンを皿の上に置いて、ぷるぷると震えてるぞ。

準「なんで俺のだけ『ハヤシライス』なんだよ……！」

他のと赤いルーのそれを指しながら、俺に文句を言ってきた。
うわっ、唾が飛んできた！きたないなあ……

城「なにか不服でも？」

準「そういうわけではないんだが……お前たちがカレーでなんで俺1人だけハヤシライスなんだよ」

冬馬「味がよろしくないのですか？」

準「むしろ美味いんだが……」

城「ならいいじゃん」

準「作ったお前が言うなよ!!」

なんて目を見開いて突っ込みながらも「確かに美味いからいいか……」とひとりでに納得して食べるのを再開した。
美味けりやなんでも良いんだよ。覚えとけ。

小雪「城、おかわり」

城「はやっ！俺なんてまだ手すらつけてないぞ！」

さつきから珍しく黙っていると思ってたら、食うことに集中していたのか。

小雪「だって、城のカレーおいしいから」

キンキンとスプーンで皿の角を叩きまくり、早くしろと催促する。

城「はいはい……」

席を立ち、小雪の皿を運んでいく。

俺と小雪は珍しい客人たちと昼飯を食って、ゲームをしたり、カードゲームをしたりして、楽しい時を過ごした。

冬馬「今日は誘ってくれて、どうもありがとうございます。とても楽しかったです」

準「昼飯だけじゃなくて、夕食までもご馳走になっちまったな。ホント助かったぜ」

8時を過ぎ、太陽が完全に沈んだので。自宅に帰る冬馬と準を、俺とユキは玄関の外まで見送りに来ている。

城「食事について困ったことがあれば、うちに来いよ。その時はまた俺が作ってやるからさ……………金を払えばな」

準「金を取るのかよ!？」

世の中はギブアンドテイクなんだぜ?世知辛いよねえ……………

小雪「また遊びに来てねー」

城「なんでユキが言うのかわからんが……暇な時はさっき教えた連絡先に、電話なりメールなり好きにしてくれ」

遊んでいる最中に俺は冬馬と準とアドレス交換をした（ユキは登録済み）。2人のメアド……冬馬は初期状態のなんだが……準のは

r o r i - r o r i - h u r r i c a n e @ 以下機種別アド。

趣味丸出しの最悪なアドレスだった。こいついつか犯罪を起こしそうで危ないんだが……そんな時になったら冬馬が止めるだろう……
……多分。

冬馬「そうさせていただきます。デートのお誘いの時には電話で伝えますから」

城「それはユキとか？」

冬馬「城君ですよ」

城「お友達でならいいぞ」

冬馬「連れないですね……」

目を閉じて、落胆してるのか肩を落とす。

ふっ、常日頃から、大和と京のやり取りを見てる俺は断り文句を習得したからな。

つか、本当にバイなのかよ……そういう嗜好のやつっているんだな……。

準「ま、名残は尽きないがそろそろお暇させてもらつとすぜ。明日は野暮用があるからな」

小雪「寺に出家していくの？」

準「しません！！いい加減に俺を坊さん扱いするのはやめろ！単にSクラス内でのことだよ！」

城「ふーん……優等生も大変だな」

小雪「がんばれ」

準「ユキも前まではSクラスの一員だったんだがな……つーわけで俺と若は明日の準備があるから、そろそろ帰るわ。またな城、ユキ」
冬馬「それでは城君、ユキ。週末明けにまた会いましょう」

2人が背を向けて歩き出す。

城「またな」

小雪「ばいばい」

俺とユキは門から、2人の姿が見えなくなるまで手を振っていた。

城「それで……ユキは何時頃帰るんだ？おじいさんたちが心配しているんじゃないか？」

2人で皿洗いをしている時に何気なくユキに聞いてみた。

小雪「大丈夫だよー。今日は城の家に泊まるって言ってるから」

城「そうか。なら問題ないな」

小雪「うん」

スポンジで泡を立てまくりながら、俺に返事をするユキ。

………は？

城「え、泊まるって……どこに？」

小雪「だから、城の家だよ」

城「着替えとかは？」

小雪「鞆の中に入ってるよ」

用意周到すぎる……

城「……俺にきよひく「ないよ」「ですよね」

いくら幼馴染だとはいえ、若い男女が1つ屋根の下で泊まることは色々とヤバイ気が……いや……

小雪「ゴシゴシ〜キノコ雲」

チラリとユキの様子を窺ってみると、泡で遊びながら上機嫌で皿を磨いているユキ。

……まあ、ユキ相手に俺が発情するわけもないし、学園側やファミリーたちにはれたら、黙らせりゃいいだけだしな

ブローグ〜学生編〜（後書き）

この小説のメインヒロインとしてはユキですね。

後は2、3人ほどサブヒロインを出そうと思っています（1人はもう決まっています）

お泊りと爆弾カレー

???『シンジ……急にこんな所に呼び出して、なんの用だ？俺は忙しいんだが』

シンジ『ごめんねアツシ。けど……すぐに済むから』

アツシ『だったら早くしてくれ。こんな夜中に薄暗い桜のえ……？シンジ？……な、なに……を』

シンジ『え、えへへへ。アツシが悪いんだよ、だよ？ずっと僕の思いに答えてくれないアツシ』

プツッ

居間で暇つぶしに見ていたドラマがあまりにもつまらなかったので、リモコンを操作して電源を切る。
冬馬のやつ、「おすすめの番組があるので見てみたらどうですか？」なんてメールを打ってきたのは良いんだが………

BL物を進めるなよ……！

『ドキドキメモリアル』桜の木の下であなたを討つ……なんてタイトルだったから、気になった俺がバカだったよ！つまらなすぎる！途中から見たせいで話しの展開がわかんねーし。登場人物が男ばかりでむさ苦しすぎんだよ！

このドラマの監督はいつたいなにを思って、作ったんだよ………これが流行ると考えていたら、来世はシャー芯にでも生まれ変わった方

が良い。

城「無駄な時間を過ごしちゃった……」

こんなことなら部屋で勉強していたほうがずっと有意義だったぞ。

小雪「城くお風呂空いたよ」

ふわっとシャンプーの香りをさせ、ユキがパジャマ姿で濡れた頭をタオルでふきふきしながら、入ってくる。

ユキのパジャマは黒を強調としたナイトドレスだ。胸の所にハート型のレースでアクセントの付いた、清楚で可愛いドレスだ。ユキのイメージとは反対の色だが、これが結構似合っているのだ。まあ、身内囃員のフィルターを外して見ても、スタイルの良いユキはなにを着ても大抵は似合うんだがな。

城「特にやることもないし、入ってくるとしますかね……っと、その前にユキの布団を出してこないとな」

ユキが泊まりに來ると、一階に空き部屋があるので（ユキの私物も置いてある）そこで寝る事になっている。

小雪「布団ならいつもの押し入れにあるんでしょ？僕が持ってくるから、城はゆっくろお風呂に浸かってていいよ」

城「そか。じゃ、頼むわ」

小雪「アイアイサー」

敬礼をして、ユキは二階に上がっていった。

俺は今日一日の疲れを取らせてもらおうかね。

城「良いお湯だったな。……ん？」

小雪「すゝ……すゝ……」

居間に戻ると辺りに色鉛筆と画用紙が散乱していて、その囲まれている中にユキが色鉛筆を持ったまま、うつ伏せで寝ていた。

遊び疲れたのかもな。朝からやけにテンションが高かったし、昼真は冬馬と準と一緒に騒ぎまくったし。

壁に張り付いてある時計を見上げると、時刻は0時を過ぎていた。

春になったとはいえ夜はまだ肌寒い。こんなところで寝てしまったのは風邪を引くかもしれないし、部屋まで運んでやるか。

城「やれやれ……世話のかかる義妹だ」

色鉛筆はケースにしまい。画用紙は全てまとめた。ユキを起こさないようにゆっくりと仰向けに体勢を変えさせ、首筋に右腕を。両足

の脇に左腕を刷り込ませ、震動を起こさずにゆっくりと抱え上げた。
いわゆるお姫様抱っこってやつだ。

俺はユキの部屋（仮）まで運んでベッドに寝かせてやった。紙芝居
の道具をリビングに戻ろうと踵を返した時に

小雪「うつ……ん……じょ……う」

俺の左袖のところに引つ張るような力を感じた。振り返ってみると
ユキが俺の袖を摘んでいた。

……寝ているんだよね？

城「……離してくれないと俺は部屋に戻れないんだが……」

声に出してみるが、部屋からはユキの寝息だけが静かに聞こえるだ
けだった。

寝ているのか……。寝ているユキの力なんて、ほとんどないに等し
いので簡単に解くことはできるんだが

小雪「いっちゃ………やだ」

なんて不安そうな顔で寝言で言われては、傍にいてやろつという気
持ちは強くなってしまう。

……はあ。一応リビングや他の部屋の電気は消したしな……しゃー
ないか。

ピシユッ

パチッ！

近くに落ちていた消しゴムを、ドアの真横にあるスイッチ目掛けて投げつけた。見事に命中し部屋の明かりは消えた。

NICE SHOT!

城「……ではお邪魔します……っと」

ユキに掴まれたまま俺はゆつくりとベッドに入り、布団を被る。俺とユキの空間を多少開き、ユキの顔を見つめ掴まれていない手で頬を慈しむように撫でてやる。

城「おやすみユキ。……良い夢を」

俺は目を瞑り、意識を闇の中へと預けた……

その日はなぜかぐっすりと眠れた。

s i d e 〱 榊原小雪 〱

小雪「ん……んん？」

ん~~~~……えつと、昨日紙芝居を作っていたら眠くなっちゃって……そのまま寝ちゃったんだ。でもちゃんとベッドの中に……あれ？

城「zzzzzzzzzz」

どうして城が僕と一緒に寝てるんだろう？もしかして僕をここまで運んできてくれたのかな？それとも夢？……ふわぁ。まあいいや。まだ眠いしもう1回寝よ。

小雪「おやすみ」

もぞもぞと布団の中で動きながら城に近寄って、僕はもう一度夢の中へ旅立った。

s i d e 〱 榊原小雪 〱 o u t

4月19日（日曜）

城「…ん…朝か」

いつもとは違う感触と匂いに刺激され、俺は目を覚ました。
確か…ユキを部屋まで運んで、ユキが俺の袖を掴んで…

小雪「すゝ」

…なんか俺の胸の中でユキが穏やかな表情で寝ているんだが。
間違えた。この表現は死人に対する扱いか。朝起きだからボケがいまいちだ。

城「おはよう…ユキ」

小雪「ん…」

軽く頭を撫でてやると、身動きしさらに俺に身を寄せてくる。

…なんか柔らかく暖かいものが当たっているのは、ユキのムンげふんげふん！！いくらユキと言っても、もしも万が一、億が一になにか間違いがあつてからでは遅い。さっさと起きる事にしよう。

城「よつと」

ベッドからゆつくりと出て、天高く体ごと腕を伸ばして体の調子を確認する。

今日も異常なし。絶好調だな。だるいが。

城「まず洗面所で顔を洗つてくるとしますかね」

ユキが被っている毛布を直してやり、俺は部屋を退出する。

朝飯は昨日のカレーにするか。一日経つと、カレーの味がまるやかになって美味しくなるしな。

城「カレーに七味唐辛子を10回振り掛けるとか……舌の感覚が麻痺しないか？」

やたらと遅い朝飯（時間帯は11時前）の準備をしながら、この前ファミリーのメンバーと、カレーになにをトッピングするかの話題で、京が言っていたことを思い返していた。

岳人、ワン子、モモ先輩はカツといった王道派。大和と俺は福神漬けやチーズ等の副産物を入れることが多い。ユキはマシユマロとかあるもの全てを混ぜ合わせてたりする、カオスな組み合わせを好む。

モロは地味キャラらしくない派。

京は…… キムチやらブラックペッパーやらタバスコやら、辛い調味料をしこたま振り掛ける。辛い物好きの人が挑むことすら躊躇させる超辛党派だ。俺には到底真似できない。

小雪「はよー……」

寝惚け目を擦りながら、ユキがてくてくと右手にうさぎの人形を地面に引きずりながら、起きてきた。

白いうさぎとユキのチョイスはかわいいとは思うんだが……それは人形が普通のだったらの話である。

この人形の種類は『臓物アニマル』と言って、動物の腸が飛び出していたり、口から血を吐き出していたり……とても趣味が良いとは思えないくらいの不気味なデザインばかりなのだ。

城「おはよう。朝飯がもうすぐできるから、顔を洗って身だしなみを整えてきな」

小雪「うんー……」

覚束ない足取りで洗面所に歩いていった。

……洗面所で溺れてたりするなよ？

小雪「ねー、城」

城「むぐ……ん？なんだ？」

寝巻きのままで、昨日の余ったカレーと焼き魚の朝食を2人で取っていたら、ユキが自分のコップに麦茶を注ぎながら話しかけてきた。

小雪「僕をベッドまで運んでくれたのって、城だよね？」

城「そうだが……」

俺以外に誰もいないだろ。親父と母さんは海外生活を満喫してんだし。

小雪「じゃあさ、僕と一緒に寝てた？」

……なんて答えるべきか。正直に言うのもハズイし。かといって、ユキに誤魔化すのもなんだか……良心が痛くなる。

城「なわけあるか。自分の部屋で寝たに決まってるだろうが」

が、ここは出任せを言っというたほうがいいだろう。ユキのことだから、ふとした拍子に喋っちまうかもしれないからな。

ファミリーにばれるのはまだいい。だがクラスの連中や教師陣に知られたりしたらかなり面倒なことになる。後者の方なんかだと良くて停学。悪くて退学の始末になる可能性が高い。

……いや、川神のじいさんが学園長なら大丈夫か。脅迫のネタに使

われそうだが、多少のことなら目を瞑ってくれるだろう。

小雪「ふーん……やっぱり夢だったのかぁ」

城「そうだ夢だ」

小雪「だよ。城が僕にえっちなことするわけないもんね」

城「どんな夢みたんだよ!？」

ユキにはまだ早い！

……いや、一応ユキもお年頃なんだよな。精神年齢は低いけど。

小雪「……ちよつと ねんかな」

城「は？」

小さすぎて良く聞こえない。

小雪「なんでもないよ」

いつもの笑顔で返してきて、カレーに焼き魚をまるごとのつける。

……ん？ちよつとユキの顔が赤くなっていないか？そんなに今日は暑くないんだと思うんだが。

小雪「……にぶちん」

城「はい？」

小雪「なんでもないよー」

城「あ、こらっ！人のおかずを奪わない！」

取り返そうとするが、それよりも早くユキの口の中に焼き魚が入ってしまった。

城「ぬがー！ーッ！！まだ一口も手をつけてないのに！！」

小雪「むぐむぐむぐ……ふあれーにほおふえるのなら、ふあふえてもいいよ？」

城「食いながら喋らない！！」

なに言ってるのかさっぱりわからん！

小雪「（ごくん）カレーに載ってるのなら、食べてもいいよ？」

城「皮しか残ってないんだが？」

小雪「コラーゲンたっぷり」

城「いらんわ！！」

なんてアホなやり取りをしていたら

~~~~~（天国と地獄）

小雪「電話が鳴ってるよ」

廊下のほうから、天国と地獄のメロディが鳴り響いていた。これは

うちの電話機の着信音だ。これに設定したのはもちろん親父である。

城「ったく……飯を食ってる最中だったのに無粋なやつだぜ、まったく」

食うのを中断して席を立つ。

城「言うておくが、俺のカレーに手をつけるんじゃないぞ!」

釘を刺しとかなないと俺が通話してる間になにか悪戯するか、食べつくしちまうからな。

小雪「わかった」……………多分」

城「多分かよ!」

ぜってーなにか仕出かす気だな!こうなったら、さっさと電話に出て用件を終わらせてやる。

城「あーはいはい、今出ますよ!」

煩く鳴り響く電話機に悪態を付き、受話器を手取る。

城「もしも」こら————!——さっさと出る——————  
——ッ——!——」ぐわっ!」?

受話器の向こうから、大音量の怒声が!

み、耳が……頭がくらくらする……………

ええい誰だ!!鼓膜が破れたらどうしてくれんだ!!治療費払ってくれんのか!?

「???」やつと出てくれたわね……。携帯に10回以上連絡したのに一度も出てくれないんだもの」

あ……自分の部屋に携帯置いたままだった。昨日ユキんとこで寝ちまってから、一度も部屋に戻ってなかったからな。

だが、朝っぱらからこの声は頭に響く！もう少し声のボリュームを下げるや！

城「ええい！やかましい！さつさと用件と名を名乗れ！！」

一子「そっちも十分やかましいわよ！あたしよ、一子よ！」

城「なんだ犬かよ……俺は犬に知り合いはないんだ。じゃあな」

一子「なんだとはなによ！！って、切ろうとしないでよ！まだ用は言ってないんだから！！」

うろたえる様子が目に浮かぶ。

にしても、勘の良い奴め。俺が受話器を振り下ろそうとする前に止めやがった。

犬だから直感にでも優れているのかもしれないな。

城「こっちはまだ朝食が済んでいないんだ。早くしろ」

一子「朝食って……もうお昼前よ？」

城「言いたいことはそれだけなのか？じゃあな」

一子「だ、だから切ろうとしないでっばー！」

城「なら、3秒以内に用件を言え。さもないと通話を遮断し、お前の家に流星が降り注ぎます」

一子「え？え？」

城「3……2」

一子「ちょ……！」

城「1……」

一子「しゅ、修行に付き合って……！」

あともうちよいだっただのに……ギリギリで言いやがった。

城「修行ねえ……バイトってことか？」

大抵はモモ先輩の相手や門下生の指導のついでに、ワン子に色々やってあげてる。だから、あんまし個人的に一子に教えることは少ない。

一子「ううん、今回は城が教えてくれた必殺技の成果を見てもらいたいの」

俺たちが川神学園に上がる何年前。モモ先輩との試合で使った技を一子が見た時に、教えて欲しいとせがまれたので教えてやったんだが……当然のごとく、最初はまるでだめ（略してマダオ。まるでだめなおんな）だった。

だが、努力家のワン子は日に日に、上達していった。

城「ふむ、最後に見てやったのが2ヶ月前か……自身はあるのか？」

これまで見てやった回数は30回以上は越えてるのだが、完全に自分の物にしたのを見たことがない。

一子「もっちろん！今度のあたしはいつもと違うわよ！」

城「それ毎回同じ事言ってるだろ」

どうせ今回も失敗するんだろうな。

一子「あれっ？そうだったけ」

こいつの脳みそのサイズはいくつなんだよ。チンパンジーよりちっこいんじゃない？

一子「でもでもっ、岩を切り裂くまでの段階はいったんだよ！だから完全にマスターするものもうすぐよっ！」

ちなみに俺が教えている技は『音速派』<sup>ソニックブーム</sup>。

気を手に込め、鋭くなぎ払うことで空気を切り裂きながら進む衝撃波が生まれる技だ。

俺は気のできるので楽にできるが、ワン子はあるまじ上手く扱えないので他の遣り方で教えてやってる。

ワン子の得物は薙刀。基本は同じだが修行の仕方が違う。気をコントロールするトレーニングは、滝打ちや瞑想。主に精神修行をする。しかし、ワン子の場合はただひたすらに高速で薙刀を振りまくる。それだけ。それだけなのだが……習得するまでの道のりは険しく、



長い。

衝撃波を発生するだけでも、4年はかかることをワン子は半分の2年で出来たのは、正直凄いと思った。

こいつはアホでも努力の天才なのだ。

……これを勉強に少しでも向けてくれればいいんだがな。

城「……はあ、わかったよ。だるいが見てやるよ。修行の成果とやらを」

一子「ホント!？」

受話器越しなので表情や態度はわからんが、声から察するに犬耳が生えているだろう。

城「ああ。だけど、色々と準備があるから昼過ぎでもいいか？」

一子「いいよ。あたしはいつでもOK。準備完全よ」

城「完全じゃなくて、万全な」

一子「準備万全よ!」

言い直した!

城「あ、そうだ。ユキも連れて行っっていいか？」

もしユキが付いていきたいと言ってくる可能性があるから、ワン子の許可をもらっとかないとな。

一子「うんいいよ!。……ってあれ?ユキがそこにいるの?」

ぐあ……失言だったか？

バカの癖に妙なところで鋭いことがあんだよな。

城「んじゃ、午後に川神院に行くわ。じゃな」

一子「え、ちょ」

ガシャッ

有無を言わずに強制的に通話を終わらせる。

都合が悪くなったら、適当に誤魔化す。大和とモモ先輩の教訓です。

小雪「誰からだったの？」

食い終わったユキは食卓の上で、割り箸を組み立てて城（俺じゃないぞ）みたいのを作ろうとしている。

城「ワン子から。修行に付き合えってさ」

小雪「行くの？」

目線は目の前の割り箸城のまま聞いてくる。

城「暇だからな。ユキも来るか？」

小雪「城も行くなら、僕も行く」

そんな理由かい。

まあ、俺がどうか行くときは大抵ユキも付いてくるから今に始まっ

たことじゃないか。

一子も犬だが、ユキも負けじと性質が犬に近いよな。

城「そうか。なら行く準備をしとけよ。服装は出来るだけ身軽な格好でな」

小雪「うーい。……ようしっ東京タワ〜」

城「すごっ!」

割り箸に色を塗ったらミニチュアにも劣らないほどの完成度だ。やたらと忠実に細かいところまで再現しすぎて……。テレビチンピオンに出演依頼が来てもおかしくないくらいの芸術作品だ。

城「……最後には崩す嵌めになるが」

ユキに聞こえないようにぼやき、半分ほど残っているカレーを食べる。

城「……………ん？」

なんか体が熱くなって……………って!

城「カラー……………ツツツツ!!……!!」

ぎゃ……………!!?なにこの舌が焼け付くような感覚は!?

辛いを通り越して痛いんだけど!!

小雪「おー、城の火炎放射」

口を開けて驚いている暇があったら水をくれ！

小雪「消火」

バシャーーーーーー

口から火を噴いている俺に、バケツ一杯に汲んだ水をユキがぶっ掛けてきた。

.....

小雪「これでよし。.....城？どうして僕の頭を掴むの？」

城「お前のせいだからだろうがああああああ！！！！」

小雪「おー、僕宙を浮いてる」

.....結構力を入れて片手で頭を鷲掴みにしているのに、なんでユキは楽しんでいらんだ.....？  
本当に掴み所がわからないやつだ。お、我ながら上手いこと言ったね。

## お泊りと爆弾カレー（後書き）

城はD・C・？よりは怠けていません。  
次々話から原作開始予定です

ユキにマシユマロを与えた、しかし手で払いのけられてしまった！（前書き）

タイトル関係ありません。  
今回はかなり短いです。

ユキにマシユマロを与えた、しかし手で払いのけられてしまった！

川神院（裏手）

一子「城？どうして口が真っ赤にな

」

城「気にすんな」

一子「で、でm「気にすんな」う、うん」

俺の無表情の迫力に蹴落とされ、ワン子は疑問を懐きながらもその場は引いてくれた。

激辛カレーを食って、あまりの辛さに火を吹きましたなんて言えるか！

小雪「今朝ねー。城が食べたげかむぐう」

余計な事を言いそうになったので、横からユキの口を両手で塞ぐ。少し黙っていようか。

一子「？」

今回は、ワン子は目線を上に向けなにか？って顔してるしバレることはないか。

城「そっいゃ、あのエロじいさんと百合先輩は？」

今さらだが、ワン子とユキの格好は学校指定の体操着……つまり半袖シャツにブルマという、他の学校では多数廃止にされているので、

他校生にしてみれば滅多にお目にかかれない希少価値が高い格好である。

無論俺も、岳人ほどではないがムラっとすることはたまにある。だって健全な男子ですから。

ワン子「ゆ、百合……」

小雪「ユリ？」

犬耳を生やして真っ赤になっているワン子とユリの花を手に持つて首を傾げているユキ。

だから、いつもどっから出してんだよ。手を後ろにやったらユリの花を持っているんだもんな……謎だ。

城「その反応……ユキよりワン子のほうが不純だとみた」

一子「そ、そそそそんなことないわよ!!」

城「んじゃ、どうして耳まで顔を赤くしてんだ？ユキは平然としてるってのに」

一子「あうっっ……」

縮こまるワン子。やっぱりこいつを弄るのはおもしろいな。

だが、あんましやりすぎてはいけない。泣く寸前程度に弄るのが風間ファミリーの鉄則だ。

小雪「んっ……なんかモモ先輩の匂いがする」

鼻をくんくんと嗅ぎ、辺りを見渡すユキ。



匂いって……やっぱりユキも犬だ。

城「匂いはわからんが……この辺りから邪悪な気配があることは確かだな」

あの茂みからだな。ユキに視線をロックオンしている気がする。

???「邪悪とは失礼だな。純情と言え純情と」

シュバッと飛び出して来て、ユキを抱え上げた。

百代「そーら、そーら」

小雪「わー。お姫様だっこだー」

城「どこが純情なんだよ……」

一子「あ、お姉さま。帰ってきたんだ」

ワン子が私服姿のモモ先輩に抱きつく。  
これなんていうハーレム？

百代「ついさっきな。まったくあのくそじじい、私を無償でこき使いやがって」

城「どこに行ってきたんだ？」

百代「学園にな。なんか力仕事が多いから、手伝えってな。面倒だから逃げてきたけど」

そんなんでいいんかい。俺が言うのもなんだけど。

百代「で、なんでユキと城がいるんだ？もしかして私とたたか「今日は別件です」つまらん」

ユキを降ろし、指を啜えてこっちを見てくる。

そんな目してもだるいから戦いたくないっての。

小雪「ワン子の修行の成果を見にきたんだよ」

百代「ワン子の？」

一子「そうよっ！生まれ変わったあたしを見て驚かないでよね！」

小雪「僕に勝てるのかな？」

一子「城の技を習得したあたしはユキなんて目じゃないわ」

余程自身があるのか、見栄を張っているのか……

小雪「ほんとかな。僕だって城の必殺技使えるもん」

ユキと一子の対戦成績は8割がユキの勝利。こうみえてもユキは俺と親父の指導と特訓に付き合ってたからな。かなりの実力者だ。

ユキの戦闘スタイルは基本素手。テコンドーの使い手である。俺が漫画の主人公の使う必殺技がカッコ良かったので、見様見真似で俺も習得し、ユキにも指南してやったのである。

親父から剣術について学んでいるので、剣類の扱いにも長けている。

一子「ふっふん。天狗面しているのも今のうちだけよ。それじゃ、

薙刀を取ってくるわ」

ワン子は意気揚々として院に戻って行った。

百代「……ワン子」

その後姿をモモ先輩が悲痛な表情で見ていた。

……モモ先輩もワン子のことに気が付いているのか……

努力はあっても戦いの才能が薄いということを……

一子「よーっし、張り切って行くわよーっし！」

ブンブンと薙刀を頭上でプロペラみたいに振り回す。

俺、ユキ、モモ先輩はワン子が岳人の5倍はある大きさの岩と対峙しているのを突っ立って傍観している。

百代「なあ、城。お前から見てワン子のソニックブームの完成率はどのくらいだ？」

ワン子に視線を向けながら、聞いてきた。

城「前回の結果から、ワン子の努力をたして計算するに……50パーセントぐらいかな」

百代「ちょうど半分か」

小雪「それでも、威力は高いんでしょう？」

城「元々ソニックブームは気を使用して放つものだ。相当な化け物じゃないかぎり、生身の人間ができるもんじゃない」

100パーセントの力を發揮して、ワン子のソニックブームと俺のソニックブームがぶつかりあったら、打ち負けるのはワン子のほうだ。

百代「……なんで私を見ながら言う」

俺の視線に気に触ったのか、ジト目で見てくる。

城「だって、あなた歩く核兵器じゃないですか」

百代「チートキャラのお前が言うか!？」

城「俺は自覚していますから」

すまし顔で返す。

百代「その顔……腹立つんだが!」

シヨボツ！

城「ほいつ」

パシッ

モモ先輩のナウマンゾウ8頭分はあると思われる拳を片手でいなす。  
俺の片手の頑丈差はマンモス10頭分です。

百代「本気で頭蓋を粉碎しようとしたのに、いとも簡単に防ぐとは……さすがだな」

城「あんた俺を殺すきかよ！！！」

俺じゃなかったら死んでたぞ！！

小雪「あ、ワン子が構え始めたよ」

ユキの声で、いがみ合っていた俺たちはワン子に目を移す。見ると、ワン子は居合いの構えに入っていた。

一子「はあああああああああ」

さてはて……どうなることやら。

一子「城直伝！迅速なる刃」

この掛け声は俺が言えといったものだ。必殺技にカッコいい掛け声は必須だしな。ワン子も満更でもないし。

一子「ソニックブーム  
音速派!!」

薙刀が横に振り払われ、三日月形の衝撃波が放たれ

スパッ

岩が斜めに切り落とされた。

ズズー………ン!

小雪「岩が真つ二つになっちゃったね」

百代「……城」

城「……」

なにも言わずにワン子のとこへ歩み寄っていく。

一子「……ど、どうだった?」

真剣な表情だが、その太陽の輝きを持つ瞳の奥には僅かの不安がみられる。

城「……」

軽く息を吸って一子に言い渡す。

城「本来のソニックブームなら、あの程度の岩石は木っ端微塵にできる」

一子「……」

唇を噛み締め俯く。

やれやれ……早急なやつだな。先急ぐなつての。

城「だがそれは気を扱うのが前提だからな」

一子「え……？」

城「気を使用しないソニックブームなら、あれでも上出来だ」

一子「それじゃあ!」

城「合格だ。これまで良く頑張ったな」

ワン子の頭を撫でる。

一子「……うう」

城「えっ、ちよっ、なんで泣くんだよ!？」

外野が『なーかした、なーかした』と囃し立ててくる。

俺が悪いのかよ!

一子「違うの……やっと技が完成して…城に撫でられたら嬉しくな  
っちゃって」

ごしごしと顔を拭い、笑いかけてくる。

……不覚にもかわいいと思ってしまったのは内緒だ。

百代「おい、なに妹と2人で良い雰囲気になってんだ」

小雪「なってんだー」

城「ぐはあっ！」

突然の衝撃に俺は吹き飛んでしまう。

頬と脇腹に激痛が！

あいつら！本気で蹴ってきやがった！！

一子「あ、あたしと城が……？」

百代「おめでとう、ワン子。さすがは私の  
赤くなつてないか？」  
ん？なんか顔が

一子「そ、それはただ暑いだけよ。お姉さま」

百代「そうか？なら私の勘違いか」

いたたたた……ワン子に注意が言ってたから障壁を張りわすこふっ！

小雪「このー、女誑しはトーマだけで十分だ！」

城「なに言ってるのか、さっぱりわからんぞ！！重いどけ！」

昨日のように、また俺に乗っかってきやがった。

百代「どれどれ、私が足つばをマッサージしてやろっ」

グリッ！グリッ！



城「あだだだだだ！え、決るように押すな！それにそこはつぼ  
じゃない！！」

百代「おねーさんに向かってその口の聞き方は……矯正の余地があるな」

小雪「んしょ。これくらいの大きさでいいかな？」

ユキとモモ先輩のポジションが入れ替わり、さつきワン子が切り裂いた岩石の半分が、ユキの両腕の中に抱えられていた。

城「ユキ！それはヤバいつて！！いだあ！モモ先輩爪が食い込んでるつて！！ワン子ーーーー！！！！た、助けてくれーーーー！！！！」

唯一リンチに参加していないワン子にヘルプコールを出すか……

城「つて、いない!？」

ワン子がいいた跡は広い芝生しかありませんでした。

百代「ワン子には軽くシャワーを浴びてこいと言っておいたからな。お前の味方はここにはいないぞ」

ひょっとして……詰んだ？

小雪「えーい、岩石落とし」

ズー  
――  
ン！！

この日川神院で、1人青年の断末魔  
が川神市全体に行き届いたという……

ユキにマシユマロを与えた、しかし手で払いのけられてしまった！（後書き）

あ~~~~~！3つの小説を同時にやってるから、更新がおせえ！！  
しかも受験勉強とか……やってられるかボケ—————！！  
！！

## 朝の登校風景その1

城「戸締りオーケー、電機も消したし……行くとしますか。……もしも、ユキ起きてるか？」

玄関の鍵を閉め、体を反転させると、ユキが立ちながら寝ていた。

小雪「んっ……起きてるよっ」

目を瞑りながら返事をする。  
器用なやつだ。

城「ったく。睡眠時間を削ってまで起こしにこなくていいっての」

鞆を肩に担いで歩きだす。深夜になりながらもユキは趣味の紙芝居を制作していたらしく、そのせいで今にも寝そうになっているのである。なのに律儀にもユキは体に鞭打ってまで、起こしに来てくれたのは嬉しいんだが……これじゃ本末転倒だろ。

小雪「そしたら城……寝坊するじゃん……ねむい」

中学生の時に、ユキが風邪を引いて、家に起こしにこれなかった時俺は昼過ぎに起きたんだっけ。

あの時は担任にめっちゃ切れたな……

城「出席日数はかなり足りてるし、一回くらい遅刻したって問題ないっての。だから、眠い時はしっかりと」

ん？さっきまで隣りに歩いていたユキがない。

どこいった？後ろを振り返ってみたら

小雪「zzzzz」

道のと真ん中でぐでぐとうつ伏せに垂れて、寝ていた。  
急ぎ足でユキのもとに向かう。

城「おい！こんなところで寝るな！注目の的だぞ！」

小雪「あと五分だけ……ほんとに」

城「らき たネタは古いぞ！」

あーもう！他の一般人が何事かと物珍しそうに見ているじゃねえか！  
しょうがないか……

城「ほら、さつさと乗れ。途中まではおぶってやるから」

腰を降ろしおんぶの体勢に入る。

見世物になっちまうが、ここでもばけっとしているよりはマシだ。

小雪「うにゅ……」

首に腕を回され、背中に乗ったのを確認して、ユキを背負って歩いていく。

みんなと合流する前になったら起こすか。

どうかそれまでは知り合いに見られませんかように……！

さて……もうすぐ、いつものところに着くからユキを起こすか。

城「ユキー、起きろ。後は自分で歩きな」

背中を揺さぶる。

小雪「ううー……まだねむいよ」

城「みんなが来るぞ」

小雪「じゃあ……おきる」

ゆつくりと降りる。

城「学校に着くまでは我慢しな。授業中に寝ればいいだろ」

ユキの成績は一年の後期期末以外のテストは20位に入るほどの実力者だ。授業中では寝るか、紙芝居を作るなどと、他のことをやっているらしいんだが、なぜか頭が良い。

小雪「そうする……ふあ……」

なんか俺まで眠くなってきた……

ユキの欠伸に釣られたかもな……マジ眠い。

京「おはよう師岡卓也。2-F所属趣味ネットや漫画」

卓也「なんだかえらく説明的だなあ」

京「モロは影が薄いから存在を確認しないと忘れそうで」

卓也「どうして、僕と顔を合わせた人は揃いに揃って、同じ事を言うのかなあ!!」

岳人「それはお前がサブキャラだからだろ」

卓也「それを言ったら岳人もでしょ」

大和「なに言ってたんだお前ら？」

岳人「なんか言わなきゃならない気がしたんだよ。京のやつ朝にフられて機嫌が悪いんだよ」

卓也「……ああ、そういうこと。ってか、京に影薄いとか言われたくないよ!」

京「今日もナイスツッコミでよろしい」

岳人「モロはいつだって精一杯生きてるよな」

卓也「（無視）あれ、キャップはまたどこへともなく？」

大和「消えた。ま、気にすんな」

京「モロ。顔にやけすぎ、軽く気持ち悪いよ」

卓也「（ジャンプ読書中）今週のトラルは中々Hで良かったんだ

よ」

岳人「お、マジで？何回パンツ出た？」

卓也「見てよこのシャワーシーン、これ単行本だと乳首書き足されてるね」

岳人「どれどれパンツのそこだけ見せろ！」

卓也「しかもほら、捕まったヒロインの足元にチラリとアメーバが見えてるじゃん。これ来週襲われるってサイン」

小雪「おー、縞パンだー」

城「これはまた、中坊にはまだ過激すぎるシーンを……」

モロの手元のジャンプを後ろから、覗き見る。

卓也& a m p・岳人「う、うわぁ（のわぁ）……！」

城「はよっす」

小雪「おっは〜」

大和「おはよう。城、ユキ」

京「おはよう2人共」

驚いた際にモロの手から、上に放り投げられたジャンプが俺の地点に落下してくる。



それ片手で、なんなくキャッチする。

城「今週号のか。放課後になったら俺も買おうとするかな」

これは俺の生きがいと言っても過言ではないからな。

京「それは過言であって欲しいよ」

城「心を読まないでくれ。ほれ」

ジャンプをモロに投げ返す。

卓也「きゅ、急に出てこないでよ！びっくりするじゃないか！」

岳人「一声ぐらいかけろつての。これで心臓が停止して死んじまったらどうすんだ」

城「そのまま死ねば？あ、お前の遺品は俺が引き取ってやるから安心して逝けよ」

岳人「やらねえよ！！お前にやるんだったら、百歩譲ってモロに渡すつての！！」

卓也「そこはもつと譲歩してよ！」

小雪「やーい、モロのムツツリスケベー。岳人のレパー」

卓也「む、ムツツリ！？」

岳人「エロシーン見てるだけで、そんな不名誉を与えられるのかよ

「！！つか、なんでユキがんなこと知ってたんだよ！！」

小雪「城が「いつか岳人は性犯罪を犯すだろうから、あいつのあだ名はレ パーって呼ぶことにしようぜ」って言ってたから」

あー、んなこと言っただような言っただような……忘れた。

岳人「お、俺様がそんなことを……………するわけないだろ！！」

大和「今の間はなんだ」

城「お前…………マジでやるんじゃないだろうな？」

卓也「岳人…………さすがにそれはどん引きするよ」

京「岳人…………最低」

小雪「サイテー」

全員から白い目で見られる岳人（ユキだけはいつも通りで楽しそうにだが）

岳人「そ、そういうことは妄想の中だけですることなんだよ！そこんところは俺様も区別できてるんだからな！！」

大和「いや、当たり前だろ」

卓也「現実でやったら、普通に捕まるからね…………」

京「なにもしなくても岳人は逮捕されると思う」

小雪「岳人に近寄ると妊娠されるって、噂が立ってるもんねー」

城「幼馴染から犯罪者が出るようなことだけは勘弁してくれよな」

俺たちまで被害が及ぶからな。

害を受けるのは岳人だけで十分だ。

みんなで岳人弄りをしていると

???「あ、ナオっち、椎名っち、城君、ユッキーおはよー」

前に行く女子グループの1人に挨拶された。

その女子は小笠原千花。去年も今年もFクラスつまり、同じクラス  
メイトってことだ。

スタイルが抜群で今風の年頃女子って感じの女の子だ。男子と女子  
にも人気があるが、一部の男子には嫌われているらしい。

大和「おはようー」

城「ういーっす」

小雪「おはろーん」

京「……………」

京だけは完全無視。人見知りが激しいというより、風間ファミリー  
以外の人間はそこらへんに転がっている石ころと同じ認識なんだろ  
う。

大和「…おい、京挨拶」

京「ん」

大和に言われて軽く会釈する。せめて相手の目を見るよ。

卓也「ナオっちうだつてさ。もてるねははは」

岳人「城に至つては君付けかよ。つか、なんで俺様に挨拶はねえんだよ」

京「顔寄せ合つて漫画読んでHな発言してるから」

城「ゴリラに挨拶なんて必要ないからだろ」

岳人「てめえ、この俺様の一体どこがゴリラだつてんだよ」

鏡があつたら見せてやりたい。

小雪「師岡卓也。種族秋葉族。このカードが場に存在する限り他の人間はこのカードに話しかけることができナッシング」

卓也「なにそのモンスター扱い！？種族秋葉族ってなにさ！？本当にカードにありそうな説明はやめてよ！！」

今日もモロの突っ込みのキレは絶好調だな。

岳人「けつ、貧弱モヤシ野郎よりは野性味溢れる俺様の方が女子の受けが良いに決まつてるぜ」

受けと言つ言葉に京が「岳×卓……」と呟いていた。

そついや漫研がそんな同人誌を売り出していたっけ。売り上げはあんま良くなかったはずだが。

卓也「よく言うよ。岳人は頭が貧弱の癖に！」

大和「相変わらず仲がいいねお前ら……」

京「あの2人からは、こう…B L的なエナジーを感じる」

大和「それはお前がそういうのを好きなだけだ」

城「バカでホモでオタクって、救いようがないな」

小雪「岳×卓？」

城「ユキ、どこでそんな言葉を覚えた？」

小雪「京から借りた本に載ってた」

城「京、後でちょっと裏行こうか」

京「え、遠慮しとく」

俺の微かな威圧感を敏感に感じ取った京は冷や汗を掻き、後ずさりする（どさくさにまぎれて大和の方に擦り寄って行き、大和に引き剥がされていた）

まったく、ユキになんてことを教えるんだ。ユキにはまだ早いわ！！

卓也「（岳人だけには男として負けたくない！）」

岳人「モロにはぜってー男として負けたくねえ！」

バカ2人はお互いバツクに動物（モロはハムスター。岳人はゴリラ）を味方に付け睨みあっていた。

大和「なんであそこに人だかりができているんだ？」

ん？数十人の人だかりがあるな。川岸の向こうには……見るからに不良ぶった雑魚どもが犯罪者を包囲するように囲んでいた。  
……またあの人か。物好きだねえ」

大和「あああ、なんてこった」

大和は頭を抱えてあたふたしていた。  
大袈裟なやつだ。

京「これは朝から大ピンチ」

不良たちがな。

卓也「早く止めないと大変なことになっちゃうよコレ」  
不良たちがな。

大和「やはり流れるに俺が行くのか」

岳人「つか、お前弟だろ」

大和「弟っつーか、弟分なんだけど……俺よりもっと適任なやつが……」

全員の視線が俺に集中する。

……俺に行けってか。

城「俺かいな。説得ならモロか大和の十八番だろ」

卓也「む、無理だよ！」

このヘタレめ。

大和「万が一のことを考えたら、城が行った方がいい」

小雪「城は最強だもんね」

むむ……ユキにそう言われたら「めんどうだから、パス」なんて言いづらい。

……まあ、ストレスをぶつける相手にはちょうどいいか。

城「じゃ、ちよっくら行ってきますわ」

不良たちの元にのんびりと歩いていく。

城「はい、こ・ん・に・ち・わ~~~~」

優しいお兄さんを演じて、話しかけた。  
一斉に不良たちは俺に振り向く。

不良A「ああん？なんだてめえは」

リーゼントで鼻にピアスとか古すぎだつての。  
形から作るより、中身を固めるよ。

城「私ですか？通りすがりの正義の味方……その名もジョーだ！！」

不良A「ジョー？おい、お前ら知ってるか？」

『知らん』

城「なんだとっ？貴様らこの私を知らないとは……モグリか？」

不良A「しらねーよ、んなダサい名前なんて俺たちの地元千葉に情報が入ってねーぜ」

千葉から来たのかよ……暇なんだなこいつら。

城「この女性の情報はあるつてのか？」

俺これでも武道四天王の1人なんです。4年前に元四天王の橘を腕試しつつーことでボコして、四天王の称号をもらった。

知名度低いな俺。低くていいけど。

不良D「おうよ。川神百代だろ？最強と名高い鬼人だつてな」

鬼人じゃなくて、奇人の間違いだと思いますが？

不良E「クチャクチャ。だからあいさつにきたってわけだよ」



城「あ、それはどうもご丁寧に……」

不良F「いえ、こちらこそ  
ちのあいさつじゃねーよ!!」  
って、ちげーよ!!そっ

城「ナイス突っ込み。モロには足元にも及ばないが、もっと磨けば  
輝きを増すと思うぜい？」

不良A「こ、この馬鹿にしゃがって!女ともども地獄に葬ってやる  
よ!!」

あらあら、近頃の若者は気が短いことで。

百代「テトリス、か。なつかしいな」

お、さっきまで黙っていたモモ先輩が喋り出した。久々の生贄が見  
つかって、気分も良いみたいだな。

不良E「クチャクチャ。あ?なに言ってるんだお前」

百代「お前の携帯ストラップだよ。それテトリスのブロックだろ」

不良K「だから何だっらああ!関係ねーだろっがあ!？」

だっらああ って、言いづらくないか?ら上がり口調にする意味あ  
んの?

不良C「つつか何落ち着いてんだお前!!ムカツクぜ!」

城「お前はキ モ イ Z E」

不良C「んだとわりやあ!!」

不良A「てめえら……黙ってりゃいい気になりやがって! 覚悟しろよ!」

城「いや、黙ってないじゃん。喋りっぱなしじゃん」

不良E「クチャクチャ。このクソガキが! 死に晒せえ!!」

ガムを噛みながら釘バットを持って、俺に突っ込んできようとしたが

百代「おいおい、お前らの相手はこの私だぞ?」

不良E「ぎッ?!」

の前に、モモ先輩が男の腕関節を180度曲げた。

不良E「い、いてえええええ! 俺の腕がああああ!!」

不良A「て、てめえ! 船橋君をやりやがったな!」

船橋って言うんだあいつ。やられ役に名前なんて無いと思ってたんだが違うのか。

不良C「みんなでヤツちまえええ!!!!」

『おおおおおおおお!!!!!!!!!!』

その掛け声は死亡フラグだぞ〜

百代「遅い！！お前ら赤子か！？」

全員吹っ飛ばされていた。

観客からは待つてましたとばかりに、歓声が沸きおこる。

不良C「俺にキモイって言ったことをあの世で後悔しやがれええええ！！」

1人だけモモ先輩ではなく、俺にノコギリを持って飛び掛ってきた…… 良いこと思いついた。

城「気合防御！！」

両腕に気を込め、ガードする。

バキヤアアアアアン！

不良C「は？」

目が点になる名も無き不良。なにが起こったのか把握しきれてないみたいですね。

ま、人を切ろうとしたら逆にノコギリが砕け散ったんだから、そうもなるか。

城「俺に喧嘩を売るなんて、身の程知らずも甚だしいな。そおい！！」

不良の胸倉を掴み、ある方向に向かって放り投げる。

不良F「のわあああああああああああ!!」

その方向とは……………

卓也「うわあ!こっちに投げてきたよ!」

大和「なに考えてやがんだあいつ?!」

京「……大和は私が守る(大和の前に立つ)」

岳人「大和だけかよ!!」

小雪「フェイスナックル」

不良C「へぷろっ?!?!?」

コンボが繋がった! 2 H I T   d a m a g e   8 6 3

ユキの強烈なストレートが不良の顔面に減り込み、円を描きながら不良がこっちに飛んできた。

卓也「ふう……助かったよユキ」

岳人「かわいい顔して、やることはエグイなお前」

京「さすがはユキ。綺麗に不良の顔に入っただね」

小雪「えっへん。すごいだろ」

大和「……女に守られるってなんかな……」

京「大和は生涯をかけて、私が守ってあげるからね」

大和「かけなくていいです」

城「また飛ばされにきたのか。お前M気質でもあるのか？」

不良「ち…………ちが」

城「では思う存分に宙を舞っていつてくだされませ」

今度は腹に蹴りを叩き込み、もう一度みんなの方に送り返す。

不良「おぼほおおおおお!!??!!」

3 H I T !   D a m a g e   1 3 9 8

胃液を吐いていたが、血ではないのでセーフ。

小雪「またきたよー」

岳人「今度は俺様に任せろ！シエルタータックル!!」

不良C「みぎゃあああああああ!!!!」

コンボが繋がった!!!   4 H I T   d a m a g e   1 8 8 8

卓也「あの人が死ぬんじゃないかな……。それと岳人シェルトーじゃなくて、シヨルダーだからね」

京「城、力加減はしてるみたいだから、大丈夫だと思うよ」

大和「あれでか……？」

また飛んできたな。そろそろ飽きてきたし、モモ先輩んとくに吹っ飛ばしてフィニッシュとしますか。

城「じゃあねえ、生きていたら、知り合いにでもなつてあげてもいいぞ」

不良C「ほぎゃ ああああああああ！！！！！」

横つ腹に蹴りをかまし、モモ先輩んとこに吹っ飛ばした。

城「モモ先輩ー、パスっす」

百代「サンキューー……！」

不良たちの関節を外しながら、返事をしてきた。

お楽しみのとこ邪魔しちゃう悪いし、みんなのとこに戻りますか。

観客A「さすがは『怠惰な帝王』と呼ばれることだけあるぜ!!」

観客B「キャ――！！城君素敵――！！！」

[illegible]

観客D「城×翔……………うふふふ」

男性顧客「いーちじょう！いーちじょう！いーちーじょう！いーち  
じょう！」

モモ先輩だけじゃなく、俺にまで声援？を送ってきた。

1人なんかおかしいのがいたが。

城「ただいま」

大和&amp;卓也&amp;岳人「うおわっ（うわっ）！？」

瞬間移動をして、突如現れた俺に男陣が驚く。

小雪「おかえり」

京「おかえり。モモ先輩もすごいけど、城もすごかったよ」

ユキと京は平然として迎えてくれた。風間ファミリーは俺を除いた男性陣より、女性陣たちの方が立場強いんだよな。

卓也「心臓に悪いよ……」

城「それより、モモ先輩はどうなってんだ？」

大和「テトリスに挑戦してる」

テトリス……ねえ。子供が聞いたらやりたいと言っただろうが、モモ先輩の言うテトリスとは闇のゲームより恐ろしいゲームだからお薦めはしない。

百代「助かりたいか。ならばチャンスをやろう。ナイスなギャグで私をクスリとさせたら許そう」

不良K「ぎゃ、ギャグ!？」

百代「なにも言わなかったり、そんなの無理とか言わないほうがいいぞ。もっと私を怒らせることになるからな。ふふふふ」

不良K「ひいい、こええええええ!!完全に悪じゃねーか!!」

今まさに公開処刑が始まろうとしていた。

ギャグって……あの人完全に楽しんでいるよな。

京「相手が卑怯な真似するから完全Sだね」

それも極度のな。

百代「さあ、ガツンとギャグを言ってみろ!!」

不良K「あ、ああアメリカンジョークでもいいっすか!」

百代「その心意気やよし」

不良K「石が落ちた!ストーン!」



さぶっ！春先だつてのに鳥肌がたつ程に寒いんですけどっ！！！！

百代「まず、左腕な、はい力抜いてー」

不良K「ウツギヤアアアアアアアー！！！！」

左腕の関節をボツキリと外していた。

俺だってあんなつまらんギャグ言われたら、川に落としたい衝動が湧き上がってくるだろうからしょうがない。

またギャラリードモが盛り上がった。その話題の中心となつて  
いる当人は不良どもを上に積んでいった。

百代「ふふっ、美しく積みあがったな」

大和「姉さん、これもはやホラーだから」

大和が俺たちから離れ、モモ先輩んところに向かっていった。

百代「おっとテトリスは並んだら消さないとな」

そう言って、人間タワーに回し蹴りで不良たちを遙か彼方に吹っ飛ばした。

小雪「たーまやー」

城「花火にしちゃ、味気ないな」

卓也「花火じゃないでしょ……」

城「ここに本物があるけど？」

制服の懷から1つの六尺球を取り出す。

卓也「ええっ！？なんでそんなもの持つてるの！？といつかなんで、その大きさのものが制服の中に！？」

岳人「マジで本物なのか？」

小雪「本物だよ。一年前に僕も手伝ったんだー」

京「無駄にハイスpekだよな。でも、花火作るのがって資格が必要じゃなかった？」

城「そんなものに縛られる城さんではないのです」

卓也「そういう問題じゃないでしょ！！」

岳人「ちよつと待て。つまり、火薬の塊ってことだろ？」

城「ああ。炸裂するとこの辺り一面は焼け野原になるだろうな」

ビルに向かって打ち込めば余裕で粉々できる威力がある。

卓也「うわああああああ！これって爆弾そのものじゃないか！？」

城「つと」

手からすべり落ち、地面に触れ

岳人「うおおおおおおおつつつつ!!」

ズザーーーーーーッ!

なかった。岳人が寸でのとこで滑り込みキャッチした。

岳人「お、お落とすんじゃないよ!ここで爆発したら全員アフロヘアーになるとこだっただろ!!」

城「火が点いてないうちは大丈夫だ」

六尺球を制服の懷に戻す。

これは俺が暇つぶしで改造した制服で、各ポケットや懷の中は異次元空間になっている。アニメで例えると灼眼のシャナのシャナが愛用する夜笠だ。

卓也「い、生きた心地がしないよ……」

京「私は死ぬ時大和と一緒にじゃなきゃヤダ」

小雪「その大和、モモ先輩にデレデレしてるよ」

京「ッ!」

小雪以外「ッ!?」

み、京から尋常じゃない殺気が……。この俺ですら冷や汗が止まらない。岳人とモロはお互い抱きついて震えている。

……やっぱホモなんだな。

小雪「あ、なんか凄いスピードであつちに突撃していつてる」

ユキが指すところには一年生と思われる女性徒のグループがいた。

大和「まーた始まった。娘あさが……」

大和がこっちに戻ってきた。モモ先輩は1人の美少女をお姫様抱っこをして、恍惚に顔を綻ばせていた。

京「この浮気者！！信じて……信じていたのにつ！！」

大和「浮気もなにも、お前と俺はそんな関係じゃないだろ！？うおっ、ど、どこ触ってんだ！！」

なんだかんだで、嬉しそうじゃないか。これが男の性ってやつか……

百代「ふふん、みたかお前らあの娘完全に脈ありだ」

満足そうにやってきた。

ホモに百合に変態……風間ファミリーの半分がアレなメンバーって嫌だ……

岳人「みたか、じゃねえよモモ先輩」

百代「なん？」

岳人「いつもかわいい女の子を1人で持っていきすぎ！俺にも回してくれよ！」

城「男にも興味があつて女にも興味があるのか。見境なさすぎだろ」

岳人「俺にそっちの気はねえよ！女一筋だ！！」

ナンパしまくるやつが一筋つつても……ねえ。

百代「いやだね。欲しけりや自分で調達すればいいだろう。まあ、かわいければ私が略奪するが。ふふふ」

小雪「ドロドロの三角関係だ〜」

城「岳人なんか彼女が出来るわけないから、そんな事が起きるわけないだろ」

岳人「俺様が本気になれば、女の10人や100人くらい物にできるっての！！」

卓也「サバ読みすぎだよ」

女に振られた人数は100を超えてるが。

岳人「美人の女好きって超もったいねえよ……」

百代「おいおい、私は別に根っからの女好きってわけじゃないんだぞ岳人。ただ周囲の男が魅力なくちな。女の子にもちよつかいを出すさ」

卓也「先輩のハードルが高すぎるんだって。みんな「俺には無理」って言ってアピールすらないし」

岳人「俺様はそんな軟弱コンブどもは一味違うぜ！タフガイな俺様

と付き合ってくれ！男の素晴らしさを教えてみせる」

下心全開ってことが見え見えだ。ここまで本能と欲望に中心なやつも珍しい。

京「いきなり告白とか頭大丈夫岳人？」

大和「お前もいきなり告白やってるけどな」

どっちもどっちだろ。

百代「だめだ、魂がこもってない。それより以前にムサすぎてアウトだ」

ばっさりと切り捨てられていた。

城「これで失恋記録更新だな」

小雪「イエーイ。記念を塗り替えた岳人にバナナをプレゼント」

岳人「ありがとよ、ユキ。そんなお前の気遣いに心打たれた。この俺様と付き合ってくれ！」

小雪「ことわるー」

城「ユキに手を出してんじゃねえ！！！」

気合パンチ！！！！

岳人「あばああああああああああ！！！！」

ドボーーーーン!!!!  
川に落としてやった。

京「モモ先輩に告白して、振られた瞬間にユキに告白……アホだね」

卓也「会話の流れが不自然すぎだよね。あのバナナは気遣ったんじゃないくて、バカにしたとしか思えないんだけど」

大和「同情を通り越して憐れに思えてくる」

百代「バカはほっというて、行くぞー」

空の旅を終え、地上で死屍累々としてる男どもと岳人を放置して歩き出す。

小雪「城いこー」

ん？ユキの顔が少し赤くなってるような……ま、いいか。

城「そうだな」

岳人がずぶ濡れで這い上がってきたのが、視界の隅で見えた。

……そのまま沈んでいりゃいいのに。





## 朝の登校風景その1（後書き）

長くなりそうなので、区切りました。

ヒーローとメイド。勝てねえ（いつらのテンションに）……

みんなと（岳人含め）一年生の春休みにあった行事のこと（ちょっとした泊りがけの旅行で）で話していると毎度お馴染み変態橋に到着した。

さーて、今日はどんな変人に遭遇するかなっと。

???「フハハハハハハハ」

げ！この高笑いと人力車の音は……

岳人「おい、城。お前のお友達がやってきたぞ」

城「なにがだ？俺には高笑いなんて聞こえないぜ？うん。聞こえない聞こえない」

京「現実逃避したくのもわかるけど、しっかりと現実を受け止めて」

城「……………」

小雪「元気だせー。はい、マシュマロ。新作オロ ミン味」

オロナ ン味って……マシュマロとミスマッチすぎる。

ま、食べるけど。マシュマロ好きだし。

炭酸と甘さが交互に……なんつか、コーラをお茶に混ぜ合わせた変な味。一言で言うならば不味い。

???「おはよう庶民！そして、我が永遠の友、城よー！」

城「……はよう。朝からテンションマックスだなヒーロー《英雄》」

バカでかい声が頭に響く。

こいつは九鬼英雄。九鬼財閥の御曹司で学年1の金持ちで色々と援助もしているらしい。

中学生の頃は月に4回だけ野球部の助っ人として駆り出していた。その時に英雄と出会い、俺の野球センスに目を付けた英雄が俺を本格的に勧誘してきたが、俺は風間ファミリーに入ってるから丁重に断らせてもらった。だが、野球の話して盛り上がることも多かった。なので、なんだかんだで仲良くなったのだ。

英雄「ヒーローと書いて英雄と読むのではない！英雄と書いてヒーローと読むのだ！！」

どっちでも同じだろうが。

……こいつの金ぴかに輝く制服が、太陽の日光に反射して眩しい。

メイド「おやおや、城君に小雪さんじゃないですか。おはようございます」

人力車を引っ張っている年齢不詳のメイドがあいさつしてきた。

小雪「おっはよー、エーユー、あずみ」

城「ちつす。お前に君付けされると気持ち悪いからやめれ」

あずみ「お気に召しませんでしたか？（てめえ、英雄様に余計なこと言ったらただじゃおかねーぞ！）」

城「……ま、呼び名なんてどうでもいいから好きに呼んでくれ（は

っ、やれるもんならやってみな。腹黒メイドにやられるほど俺は落ちぶれちゃいねーよ」

お互い口には出さずに目で罵倒しまくる。英雄の専属メイド、忍足あずみとは色々と競い合ってるライバル？みたいな関係だ。

英雄のメイドになる前はどこそこの国の傭兵部隊に所属していたと言っていたが、この身のこなしからして真実だろう。

英雄「うむ。小雪よ、Fクラスに移転してしまってからというもの冬馬とハゲの元気が前より無くなっておるのだ。なので、城と共にいつでも我が陣営に訪れるがいい」

小雪「言われなくても、そうするつもりだったもんねー」

城「あいつらとは友達だからな。あっちがこなくてもこっちから攻め込んでやるさ」

英雄「うむ！それでこそ我が友だ！城のおかげで今の我があるのだからな。困ったことがあればなんでも尋ねるがよい！いつでも力になってやろうぞー！」

あずみ「さっすが英雄様！英雄様こそ多くの者の頂点に立てる王者です！」

英雄は過去に海外に出向き、テロに巻き込まれ肩が使えなくなったことがある。世界一の腕利きの医者に二度と直らないと告げられ、絶望していた時に俺とユキが気合注入をした。なのでユキともそこそこの縁を築いている。

その肩だが、俺がチート能力を使いケアルガの超強化版を唱え治癒したのだ。それっぽく手術室で行ったのでケアルガを使ったことは

誰にも知られていない。

今では英雄は他の部員とは比べ物にならない程の実力の持ち主で、4番エースでキャプテンを務めている。

俺も時々練習に参加している。

城「あー、はいはい。わかったから早くいきな。S組みのお前らは朝からやることがあんじゃないのか？」

英雄「うむ。たしかにやらなければならぬことがあるが、その前に我の天使に朝のあいさつを済ませなければならぬのだ！」

ワン子のことか……。1時期なにもかも無気力になっていた英雄がワン子に元気付けられたことで、惚れたらしいが……。その恋が報われるのかは謎だ。

百代「残念だが、妹はここにいないぞ。鍛錬してるからな」

英雄「おおさすが一子どの。日々の切磋琢磨こそ武士！我も負けておられん行くぞあずみ！！」

あずみ「了解しましたー（次会った時がてめえの命日だからな！）」

人力車に乗り込み、暗黒メイドが取っ手を持つ。

あのヤロー……。俺にだけわかるようにガンくれてやがった。マジでむかつく。

英雄「ではさらばだ！我が友、城、ユキよ！その他庶民もまた会おうぞー！！」

……去つていった。

小雪「まったね」

卓也「あれって法廷速度守ってるのかなあ」

城「あいつらに常識という概念はない」

720度世界と考え方も違う。悪いやつではないんだがな。ちよつと……いや、かなり頭のネジが外れているだけで……S組みの中ではマシな分類に別けられる。S組みの中だけでだが。

百代「相変わらずあのメイドやるな。モロたちにはわからんかもしれんが隙がないぞ」

城「英雄の身の周りの世話だけじゃなくて護衛も兼ねているらしいからな。学園の中でも屈指の腕前を持っているだろうよ」

卓也「1人で人力車引いて自動車並の速度出してるの見りゃタダ者じゃないってわかるって」

小雪「でも、マシユマロとかお菓子くれるしいい人だよ?」

だから、やつかいなんだよな。性格腹黒で英雄の前じゃ猫被つて、隠し通してるしよ。相手をするのがマジでめんどい。ユキは餌付けされてるからあいつのことを慕ってるし……

京「ユキ、知らない人にお菓子で誘われてもついていっちゃだめだからね」

大和「朝から誘惑していた人がなにを仰いますか？」

小雪「もーまんたいい。城に護身術とか不審者撃退方法を教えてもらってるもん」

襲われそうになったら、目を潰せとか急所を狙えとかそんなことばかりだけどな。

中学に上がる何年か前ユキはいじめの対象とされていた。それが沈静化してきた頃に俺はユキにある物をプレゼントした。

……それはシルバーペンダントだ。一見はただの星型の装飾品だが、これには俺が魔力を込めた代物である。その力は身に着けている者が危険な状態になると魔力を注入した者……つまり俺にそのことを察知させられる。

これを渡した理由は純粹にプレゼントしたいというだけではない。もしも、ユキが俺たちの手が届かないところでいじめを受けていたら、ペンダントの効力でユキのいる位置を特定でき助けにいけるからだ。

今でもユキは肌身離さず首に掛けている。そこまで大事にしてくれてるとあげた甲斐があったってもんだ。

一子「みんなーっ、おはようーっ！！！！」

英雄の想い人ワン子……もとい犬がロープにタイワを2つ引きずって走ってきた。

百代「お、噂をすれば妹が来たぞ」

京「やつ（拳手）」

小雪「ほっ」（両手でメガホンを作る）

城「やまびこかよ。ついでにおはよう」

大和「挨拶についてっておかしいだろ。おはよ」

ユキに俺がツツコンで大和が俺にツツコミをして（これをツツコミ3連回しという）体操服姿のワン子に挨拶。

岳人「おうワン子」

卓也「おはようワン子」

一子「なんか川辺で大勢伸びていたけど、お姉さま？」

あのテトリス野郎たちを見てきたのか。腕と足が曲がってはいけない方向に曲がっているから、ちいさい子供が見たら泣くよな。

百代「ああ。つまらない相手だったな」

一子「あはっ、やっぱり凄いや」

岳人「ワン子。今日は引きずっているタイヤは2つか」

一子「うん。その分川沿いに東京まで行ってきたよ」

東京から川神市の距離はおよそ80キロはあります。到底走っている距離ではありません（適用されるのは一般人のみ）

卓也「朝だつてのに元気だね……」



一子「いっぱい鍛えないといけないもん。あたしはお姉さまに比べるとまだまだだから」

百代「健気だろ。どうだ自慢の妹だぞ」

一子「いやー、照れるなー」

後頭部をぼりぼり搔く。

その情熱の割でも勉強に向ければ良いんだが」

一子「む、なによ城。あたしが馬鹿だっていいたいの？」

照れの表情から一転して、俺を睨んできた。

城「ありや、俺声に出してた？」

大和「おもいつきりな」

気がつかんかった……

城「ではこの場にいるみなさんに聞いてみましょうか。ワン子が馬鹿だと思っている人は手を挙げないで下さい」

橋を渡っている人にも呼びかける。

……誰も手を挙げない。

城「というわけで、お前は他人にも認められているほどのバカだ。誇っていいぞ」

一子「質問の仕方がおかしいわよ！そんなの誇れるどころか汚名じ

やない！」

卓也「バカってことは否定しないんだね……」

言ってやるな。スルーしておくのも1つの優しさなんだぜ。

京「でも、ワン子がバカなのは今に始まったことじゃないし気にしなくてもいいと思うよ」

大和「フォローしてるつもりなのかもしれんが、バカにしてるからな？」

岳人「体を鍛えるのもいいが、バカなんだからちつとは頭ン中也鍛えておけよ」

小雪「お前が言うなー」

そうだな。岳人もワン子と同レベルだろうが。

一子「な、なによ……みんなしてバカバカ言って……」

みんなにバカ連呼をされ、泣きが入ってきた。

百代「コラ城私のかわいい妹をイジメるとは許さんぞ。よしよし、なでなで」

左手はワン子の頭を撫でて、左手は俺の顔目掛けて拳を放ってきたが、首を傾けて避ける。

岳人「モモ先輩のパンチをそんな風に避けれんのかよ」

卓也「さすがはバグチートキャラだね」

自覚はしていたが、人に言われるとちょっぴり傷つくんだよな。

一子「えへへへ」

モモ先輩に撫でられだらしなく顔を緩める犬。尻尾がついてりゃブンブン左右に振っているだろうな。

一子「お前ら調子に乗ってるからブチのめすわ！もちろん物理的にね！さあ勝負よ！」

復活はええなオイ。

城「黙れ犬。保健所に放り込むぞ」

一子「ひっ！」

ブルブルと俺の言葉と睨みに震えるワン子。

大和「尋常じゃない震えっぷりだな」

岳人「万歩計を腕につけりゃ、めっちゃカウントされんじゃね？」

京「完全に調教済みだね」

城「人聞きの悪い。俺はただあんまし牙を向ける犬にはちょっとしたお仕置きが必要だと、遠回しにいっただけだ」

一子「ガクガクブルブルガクガクブルブル!!」

卓也「これのどこが遠回しなのさ!? もう少しオブラートに包んで  
言ってあげてよ!」

そうしたら、バカなんだから伝わらないじゃん。

百代「おーよしよし。お姉様がその震えを止めてあげようじゃない  
か」

モモ先輩がと豊満な胸にギュツと一子を抱きしめた。

小雪「あははっ、あんなに威勢が良かったのに震えてやんの」

ユキのバカにした言い方にワン子はモモ先輩からバツと離れ、喧  
嘩腰に戻った。

そのワン子を愛でていたモモ先輩は微妙に残念そうにしていた。

一子「なんですって、このあたしがそんな弱腰になるわけないじゃ  
ない!」

お前7行前に戻って、自分がどんな状態だったか確認してみろよ。

小雪「やーいやーい、泣き虫ワン子やーい」

一子「この! 絶対けちよんけちよんにしてやるんだから!!」

逃げ回るユキをワン子が捕まえようとするが、すばっしこいユキは  
ワン子でも困難な上に

卓也「タイヤは外そうよ」

モロが俺の代わりに代弁してくれた。  
みんなもうんうんと頷いた。

ヒーローとメイド。勝てねえ（いついつらのテンションに）……（後書き）

終了時イベント その1

城「お疲れさん。今回の話はとうだ？満足できたか？できなかったらもう一度読め！」

小雪「読め！目に穴が空くまで読むんだー！」

城「もしくは目が乾燥するまで読み続ける。そしたら幸せになれるぞ」

小雪「一条宗教にはいれゝはいるんだゝ」

城「あなたはこの壺を買いたくなるゝ無性に部屋に壺を飾りたくなるゝ」

準「訳のわからない勧誘をしない！催眠術を掛けてまで買わせようとするんじゃない！」

冬馬「1つその壺を購入します。私の部屋には華やかさが欠けていたので……この壺を置くとしましよう」

準「こんなんでは補えると思ってるのか！？」

城&小雪「まいどありゝ」

## 2 - F の変人集団と俺

朝のHR前

一子「おはよーー」

大和「おはよーっ！」

モモ先輩は3年。俺たちとは違うA棟なので校門より先で別れた。俺たちの教室は2 - F。問題児と変人が集まされたクラスだ。どう考えてもクラス編成がおかしすぎる。父兄の方々から苦情が来ないのが甚だ疑問だ。

小さい女の子「おはようございます」

城「はよっす委員長」

小雪「おっはよーマヨ」

真与「はい。おはようです。城ちゃん、ユキちゃん」

城「ちゃんはいらない」

俺をちゃん付けするどうみても小学生にしか見えない女の子は、日

々このアレな人たちをまとめる委員長さん。本名甘粕真与《あまかす まよ》だ。

純粋な心の持ち主で4月生まれってことで、やたらとお姉さんぶる一番お姉さんらしくないマスコットキャラ。

このクラスにしちゃかなりの常識人だ。……外見を除けば。

小雪「マシユマロいる？」

真与「ダメですよユキちゃん。学校にお菓子を持ち込んだりしちゃ」

ファミリーのメンバーを除くFクラス内ではユキが委員長と一緒にいることが多い。

Sクラスに所属していたユキがFクラスに遊びに来た時にも委員長と話していたことも良くあったしな。

なんか、ユキの不思議パワーと委員長の天然パワーが良い感じに吊りあっているようだ。

千花「おはよー。朝見てたよー。モモ先輩も凄かったけど城君も派手にやっていたね」

小笠原と委員長は親友同士らしく、ユキともそれなりに仲が良い。

3人一緒に行動してる時もちらほら。

和菓子屋の娘なので、2人に割引してくれたりと意外な一面もあるらしい（ユキ談）

大和「弟分としてはやりすぎないかと心配だよ。城はまだ自制してるからいいけど」

城「あんな雑魚相手に力を出す程大人気なくねーよ」



卓也「つまり、モモ先輩は大人気ないって言いたいんだね」

うん。

京「……………」

京は既に席に着いて読書モードに入っていた。少しはユキを見習って他の人と交流しようぜ……

大柄な男子生徒「一条君、師岡君おはよう。お団子食べる？」

城「おっ、いいのかクマちゃん。んじゃ遠慮なく貰うぜ」

卓也「それじゃ、僕もいただこうかな」

クマちゃん（仮）「はい、どうぞ」

プラスチックの箱から、一本の串団子を取る。  
体が大きく大らかな性格であり、色々なグルメ店に詳しく、いつでも  
もなにかしら食べている熊飼<sup>くまがい</sup>満<sup>みつる</sup>（通称クマちゃん）。料理も上手  
く、食に関して彼の右に出る者はいない。

ヲタク「知ってるか我が同士たちよ？昨日ゲーセンにq aの新しい  
バージョンが入荷したらいいんだってよ」

制服の下にオータム（美少女アニメ）の女の子キャラがプリントさ  
れたシャツを着て眼鏡を掛けているこのヲタクオーラ全開の男は大  
串 スグル《おおぐし スグル》

こいつにとって二次元が全てであり、3次元は全力で否定する真性  
のオタ。こいつも変人だが俺とモロと趣味が合うので色々と情報交

換をしたり、ゲーセンやコミケなんかに繰り出すこともしばしば。

卓也「あのクイズゲームかあ。僕はやらなかったけど、城とスグルはかなり極めていたよね」

スグル「大賢者ドラゴン組まで上り詰めたからな。全国ランキングも上位に入ってるぞ」

眼鏡をクイツと上げ自慢する。

城「俺よりレート低いけどな」

スグル「むぐ……」

満「でもすごいよね2人とも。クイズみたいな頭の使うゲームで上位入賞だなんて。僕にはとても無理だなあ」

卓也「城は元々頭が良いから納得できるけど、スグルは何回もプレイして問題と答えを暗記してるだけだけどね」

それはそれで凄いんだが。ゲームに注ぎ込んだ金は半端じゃないし、暗記するまでの精神力もよくもったものだ。

スグル「つーわけで、俺は今日麗しののアロエちゃんに会うためゲーセンに行くが城、モロ。お前らも来るか？クマちゃんもどうだ？」

ゲームのキャラ（しかも幼女）に麗しのと公言してるなんて相当末期だが。

オタじゃないスグルなんてスグルじゃないと思うのはこのクラスがアレの集まりだからだ。

城「俺も行くぜ。今週は生活費に有余があるからな」

ユキが俺んちに食いに来る時の金はこの両親からいただいている（少し多めに）最初は断ったがお二方が「ユキちゃんといつも仲良くしてくれているお礼よ。だから遠慮しないで受け取って」と言ってくれたので今では、ユキの食費代で余った金はお小遣いとして与えている（さすがに自分の物にするのは気がひける）

卓也「僕も行こうかな。この前はクリアできなかったステージに挑戦したいし」

満「誘ってくれるのは嬉しいんだけど、ちょっと用事があるから……ごめんね」

放課後の予定が決まったところで、もうちょい喋ってから自分の席に俺の席は窓際より1つ横にずれた席だ。前が「ていてい」ハンドグリップ持って筋トレしている犬。左窓際の席は「zzzzzz」机に突っ伏して寝ているユキ。犬の前は岳人と会話している大和。その横ユキの前が司馬の本を読んでいる京。で、俺の後ろは……

城「はよっすゲンさん。今日も良い天気だな」

みなもとただかつ

源 忠勝あだ名はゲンさん。岳人のお袋さんが管理人の島津寮で暮らしている。クールな性格でちょっと厳しいがめっちゃ優しいのでツンデレとも俺は呼んでいる。

それと俺が強引に誘ってゲンさんは風間ポストアミリーのポジションに定置している。ゲンさんの気分によって、風間ファミリーで行動するそんな立ち位置だ。嫌そうに参加しているが、心の内では

楽しんでいることを俺は知っている。

忠勝「なんだ？悪いものでも食ったのか、きもちわりい」

心底嫌そうな顔をする。爽やかキャラを演じただけでそこまで毛嫌いしなくても……でもちゃんと相手してくれるだけましか。お、HRの始まるチャイムが鳴った。

真与「みなさん。小島先生がきますよー」

その知らせでクラス内が一気に騒がしくなる。

卓也「まずい、ちょっとそれ僕の漫画隠して隠して！」

大和「ワン子、トレーニング器具机に出っぱなし」

一子「おっと危ない。ナイスアドバイスよ」

城「ユキ、起きろー。眠いのはわかるが、鬼が去るまで耐えるんだ」

小雪「わかったー……」

千花「ちょっと、そのオタクも寝てんだけど」

岳人「スグル、起きんと。鬼小島が来る時間だぞ」

スグル「ウオやべ……夜更かしがたたっちゃってな」

真与「！みなさん！先生が！！」

委員長の合図と同時に、みんなが背筋をピシッと正した。

ガラッと扉が横にスライドし、我がクラス担任の小島先生が愛用の鞭を持って入室して来た。

梅子「朝のHRを始める」

真与「起立！礼！」

みんなが元気良くあいさつをする。じゃねーとやり直しをさせられるからな。

梅子「おはよう！着席してよし。では出席を確認する。各自速やかに返事するように」

さっきまでの喧騒が嘘みたいに静かだ。この先生の前でくっちゃべってたら鞭打ちの刑だからな。自ら命を捨てようとするやつは誰もいない。

梅子「甘粕真与」

真与「はいっ！」

手を挙げて返事をする。やっぱり小学生にしか見えない。

梅子「ン。いい返事だ」

梅子「一条城！」

城「ボンジュール」

俺はいつも通り気だるげにあいさつする。  
フランス語で

梅子「一条、返事はいつも日本語でしろと言ってるだろうが……まあいい」

ななど注意しても、更正できないのを悟っているのか。呆れてため息を吐くだけだ。

このクラスでこんな扱いを受けているのは

梅子「  
榊原小雪」

小雪「うえーい」

力なく返事をするユキ。

俺とユキだけだ。

梅子「……お前らというやつらは……。いくら罰を与えてもまったく反省の色がないな……」

鞭打ち 避ける 雑用 すぐにこなす 授業中に集中的に当てる  
完璧に回答

と、この様に俺とユキ（去年違うクラスだが、俺が問題を起こす時はユキがいることが多かったので先生とは面識がある）にとってはあまりにも軽すぎる罰なので、どうってことはない。

城「人の顔色を窺うのは好きじゃないんで」

梅子「だがその考えでは世の中は上手く渡っていけないぞ。ま、私はその考えは嫌いではないがな」

出席が再開される。

その間にクラスメイトの視線が俺を勇者を見る目を向けていた。フ  
アミリーのメンバーは先生と同じように呆れていた。  
よせやい……照れるじゃねーか。

梅子「うむ、これで出席を終了とする」

その直後

カメラを持った猿「はあっ……はあっ……はあ、福本育郎います！」

息を切らして教室に飛び込んできた哀れな猿がそこにいた。

福本育郎。変態。その言葉はこいつのためにあると言っても過言で  
はないくらいに性のことに關しては博識である。

あだ名はヨンパチ。これを付けたのは変態二号の岳人だ。どうして  
ヨンパチなのかは……この2人から推測してくれ。

育郎「う、梅先生。セーフでしょうか？」

梅子「既に出欠は取り終えた」

鞭を床に叩きつける。

育郎「げ!？」

梅子「つまり、お前は遅刻ということだ」

千花「(うわ。今来るとか…アホすぎるんですけど)」

卓也「（南無阿弥陀仏）」

岳人「（終わったな……ヨンパチのやつ）」

小雪「ポクポクポク……チーン」

城「どうして木魚なんか持ってたんだ」

小雪「道端に落ちてたから、拾ってきた」

なんでそんなもんが落ちてんだよ。

育郎「す、すみませんでした！」

頭を下げ、遅刻したことを謝罪する。

だが謝っただけで許してもらえるほど小島先生は甘くない。

梅子「理由があれば聞こう」

育郎「い、いえ、あの、朝起きたら凄い時間で」

梅子「寝坊というわけだ。情状酌量の余地もないな。歯を食いしばれ！教育的指導！」

ヒュンと空を切り裂く音を放ちヨンパチの体に苦痛を与える。

育郎「ギャア！！いてえ！！！！」

梅子「痛くなくては覚えん！」



ムンクの叫びそっくりな表情で叫ぶヨンパチに容赦なく鞭打ちする。

梅子「お前たちもよく覚えておくといい。集団生活を乱すものには本来このぐらいの罰が妥当なのだ！どうだ痛いかな福本！痛いのか！？」

育郎「い、痛いです、痛いっ……痛いっハアハア」

いたぶられてるのに快感そうにしてるよ……あいつはMの気質があるようだな。

……よしっなら俺も人肌脱いでやろうじゃないか。

城「先生」

席を立ち上がり、SMショーが行われているところに歩いていく。

梅子「なんだ一条？今はこいつに罰を与えているのだ。用なら後にしろ」

城「ちょっとこの猿に聞きたいことがあるだけです。すぐに終わります」

しゃがみ込んで、床にへたりこんでいる猿に目線を合わせ、先生に聞こえないように小声で話す。

城「……（痛いのが気持ちいいのか？）」

育郎「ハアハア……（ああ。何度も打たれているうちに時々股間が反応するんだ）」

……それは痛いからだと思っぞ。  
でも、気持ちいいんだな。

梅子「終わったか？」

パシパシと鞭の持ち手のところで手を叩く先生。

俺はポケットに手をつ込み、チート能力を発動させあるものを作り出す。

それは

城「なあ、ヨンパチ。お前は痛いのがいいんだろ？で、梅先生はヨンパチが二度と遅刻しないようにトラウマを植え付けたい。なので

」

一呼吸おいて静かに告げる。

城「ヨンパチを宙吊りにしようと思います」

作り出した縄でを瞬く間にヨンパチを逆さに吊るす。

育郎「なーーーーっ！頭に血が！！パーンって破裂しそっだーーーー  
」

城「これで打ちやすくなるかと」

梅子「うむ。気遣い感謝する」

喜んでくれてなによりだ。

んじゃ、俺は自分の席でゆっくりと鑑賞させてまらいますかね。  
席に戻る途中で京に

京「城はSタイプだね」

なんて言われた。

鞭のビシバシ叩き鳴る音とヨンパチの快感の交えた叫び声が教室に響き渡った。

先生が教室から出るとはりつめていた空気が緩和する。なんか連絡事項とか言ってたけど忘れた。

満「福本君大丈夫？はいこのハーブ食べて。打ち身にいいからさ」

育郎「い、痛いけど……なんか、気持ちよかったあ」

城「俺に感謝するんだな。あの縄で気持ちよさも倍増したんだからな」

育郎「おうよ、お前には感謝しても仕切れないぜ！」

城「……冗談で言っただけなのにマジで感謝されるとは……」

だめだこいつ……早く警察に通報しないと。

岳人、モロ、ヨンパチが鞭談議についていけんのので自分の席に戻る。

一子「宿題写させなさいよ、大和」

大和「300円」

一子「何じゃその払えそうな金額！タダにすべきよ」

春休みの宿題か。もちろんそんなものを俺がやるわけない。

大和「委員長に見せてもらえばいいだろ」

一子「見せてくれなかったのよ……逆に怒られてさー。毎日いつでも見せてくれると思ったのにね」

大和「厚かましいわ」

城「その通りだ。俺のように忘れたことを開き直れんのか」

廊下掃除でも成績を下げられても体罰が来ようと俺には通用しないぜ！

一子「城はテストで良い点取れるからいいけど、アタシはそうはいかないもん。こういうとこで点を稼がないとね。だ・か・ら、京にユキ宿題みせて」

京「はい。私からは現代文と歴史」

小雪「僕からは数学と物理。そおい」

京は手渡し。ユキは放り投げた。

一子「イエス！」

4つのノートをget and catchしたワン子はさっそく、  
写しにかかった。

大和「京、ユキ甘い」

京「いいよ。ワン子なら。なんでも見せる」

小雪「今度なにか奢ってもらうから、気にしないよ」

城「ゲンさん。あなたはこのゆとり教育をどうお考えですか？」

腕を枕にして寝ているゲンさんに話を振る。

忠勝「知るかボケ。いちいち話をこっちに持ってくるな」

起きてまで、いちいち反応してくれる辺りホントにツンデレだな。

## 私、川神学園

名前の通り川神市の代表的な学校で、個性を重んじるための自由すぎる校則とユニークな行事・授業が特徴的。レベルはまあそこそこで生徒数が多い。よくワン子と岳人が入学できたなと思う事もそこそこにある。

中間試験は存在せず期末が勝負となる。

基本土日は休み。アルバイトOK。賭け事もOK。

この学園の特徴として、他の学校にはない『決闘』つつーシステムがあるんだが……説明するのがだるいので、他の人にやってもらおうしよう。

ま、奇抜でアレな人が多い学園だが俺は俺で充実した学園生活を送っている。悪戯すんのも楽しいしな！

時は過ぎ……昼休み。

岳人「うおおおお！開幕ダッシュー！！」

育郎「岳人てめえ！フライングしてんじゃねえ！」

学食組みは猛ダッシュで食堂に向かった。俺は週に3回はコンビニか購買で買つか、学食。残りの二日は俺手製の弁当だ。今日は適当に家に置いてあったパンやおにぎりを持ってきた。

卓也「今日はこっちで食べるんだ」

城「ああ。買い置きがあつたからな。モロは学食か？」

大和「俺もだ。クマちゃんに頼んでパン俺の分も買ってきてもらったんだ」

卓也「ううん。出遅れちゃったから購買で買つよ。ちょっと朝買つの忘れちゃったからね」

そう言つてモロは購買に向かつていった。

無事に帰還してくることを祈つてゐるぜ……ハムスター。

満「ベーカリー・ラクステイのパンはパイのようなサクサクっていう感じがいいんだよね。添加物を使ってないしクリームパンの自家製カスタードも絶品だよ」

人つて自分の趣味や得意なことを語るときは饒舌になるからな。なに言つてんのかさっぱりわからん。

一子「へー。そのパン屋ここらじゃ聞かない名前ね」

満「宮前区の方だもん。朝一で買つて来たんだ」

朝っぱらからそんなとこまで行ってきたのか……

小雪「できたー」

授業中ずっと机と格闘していたユキが用紙を持ち上げ、出来を確認するようにまじまじと見ている。

城「新作か？」

小雪「そだよ。25作品目」

京「今回ののはどんなストーリー？」

小雪「それは見てからの楽しみ」

完成作品を俺たちに見えるように置く。  
なるほど、聞くより見ろってか。

大和「昼飯の最中にユキの紙芝居か……」

一子「今回ののはだ、誰か死んだりしないよね？」

大和と一子はある見たくないようだ。

……ユキの自作紙芝居はとにかくカオスだからな。見た後は食事する気分じゃ無くなるかもしれん。

小雪「それでは始まり始まり」

始めやがったよ。

大和たちは腹を括ったのか食べるのを止め、紙芝居を見に入った。



口の中に食べものが入っていると吹き出すからな。前の作品では岳人の鼻からスパゲティが垂れていたし。

小雪「タイトルは、マリオの頑張り物語」

大和「タイトルからして、ヤバい気がするんだが」

大和。お前も何度か見てるんだから、ツッコむのは止めとけ。後半からもたないぞ。

小雪「むかしむかし第3新東京市の藁小屋に真剣でレストランされたおやじ。略してマリオとおばあさんが税金に追われながら暮らしていました」

大和「いやもう何から何までおかしいだろ」

京「年金もらってないんだ、この人たち」

一子「だいさんしんとーきょーとし？東京市の別名なの？」

むかしに税金もリストラもないし、エヴァネタを使うなら初めから東京にしとけ。マリオの説明をしとかないと、あの某ひげおやじと勘違いするだろうよ。

なんで他が特殊すぎんのおばあさんだけがそのまんまなんだ？

とかツツコミどころが満載なんだが口には出さないで置く。  
後ワン子東京は市じゃなくて都だからな。

小雪「おばあさんは川に洗濯しに。マリオは今日も生き延びるために内職で作ったものを金に替えるべく街へ行きます」

大和「だからなぜにおばあさんは追加設定がないんだ？」

大和のツツコミも虚しく、ユキの話しは続く。

小雪「ですが現実には厳しくお客さんはマリオが一生懸命作ったもの  
なんかには興味すら持ちません」

城「リアルすぎる……マリオが暗いオーラを背後に付け頂垂れているのが、目に浮かぶぞ」

京「世知辛い世の中」

一子「可哀想なマリオ……」

小雪「そんなマリオに更なる辛い事実が襲い掛かります」

大和「なあユキ。お前マリオになんか恨みでもあんの？あるんだよね？」

小雪「マリオは精神、肉体ともにボロボロになりながらも愛するおばあさんがいる藁小屋へと帰宅します」

大和「いまさらだけどビルや施設がある場所に藁小屋とか場違いもいいとこだな」

京「マリオはおばあさんがいるからこそ頑張れるんだね。いつか大和も」

大和「ユキー続けてくれ」

都合が悪くなったらそれかい。

小雪「小屋に入ったマリオを迎え入れたのは中央にぽつんとある鍋だけでした。いつもならおばあさんが暖かく労ってくれるはずが、今日に限っておばあさんはいません。マリオは不審に思います。こんなことは今までになかった。もしかしたらおばあさんの身に何かが起こったのかもしれない。マリオは一目散に川へ駆け出しました」

大和「なんか不穏な空気が流れているんだが……」

京「フラグが立ったね」

一子「フラグ？差し込むんじゃない？」

城「そりゃプラグな」

ソケットと勘違いしてんのな。

小雪「案の定おばあさんは水死体となって川にぶかぶかと浮かんでいました。世界に絶望したマリオはおばあさんの跡を追うように、川に身を投げたのでした。……めでたしめでたし」

『どこがだっ！！！』

俺と京以外の魂の叫びを上げる。どうやらクラスメイトもユキの紙芝居を聞いていたようだ。てか、最後が投げやりだったな。大方書いている時にめんどくなつたのだろう。

京「相変わらずユキの紙芝居は斬新で個性的」

大和「斬新すぎるわ！聞いていて鬱になるっての！」

城「夢も希望もねえな……作りもんなんだし、もうちょい救いようがあつてもいいんじゃないか？」

小雪「それが、現実」

笑顔で言うかよ。ユキは紙芝居を机の横に置いて、鞆の中からコンビニ袋を取り出して昼飯を食い始めた。気を取り直して……俺も食うか。

あちこちで顔が真っ青になる人が急増する中、ワン子がこの阿鼻叫喚一步手前の空気を変えるべくテレビを点けた。

アナウンサー「それでは次のニュースです」

昼休みはニュースを見るならテレビも許可されている。

アナウンサー「昨日の午後七時ごろ、埼玉県深谷市の飲食店で無銭飲食をした男が居合わせていた男子学生に取り押さえられました。調べによると男は今までも近隣で無銭飲食を繰り返しており、また窃盗品を身に着けていたことから警察では余罪を追求しています」

千花「取り押さえたの男子学生だって。イケメンかな？」

真与「勇気ありますよね。凄いです」

みんな慣れっこなのか、既に自分を持ち直していて興味はテレビのニュースへと向けられていた。

しかし、学生に取り押さえられる大人か。だらしがねえな。

アナウンサー「男を取り押さえられたお手柄の男子学生は、神奈川県川崎市在住の風間翔一さんと、限定メニューを先に注文されて腹が立っていたので本気で追いかけたと…」

あ、キャップだ。

一子「ぶはっ！」

京「妙技ムーンウォーク」

ワン子が噴出した牛乳を華麗にかわした京。

一子「あ、ごめん。ふいちゃったわ」

京「被害軽微。それより」

小雪「綺麗な虹を描いていたよー」

一子「えっ、マジ？見損ねちゃったわ」

城「んなことより、早く床を拭けよ。ほれ、タオル」

ついでに口も拭け。

千花「ちよつと！テレビ映ったの風間君！？」

卓也「…他にいないよね」

モロ帰ってきたのか。気づかんかった。流石は影の薄い（文字通り）男。

大和「今度はテレビかよ」

城「なにやってんだか……さつさと学校に戻ってこいつての」

小雪「この前は新聞に載ってたよね？」

京「うん。新聞からグレードアップしたね。当然これも新聞の片隅に載ってそうだけど」

笑顔でピースして、写っている写真が目には浮かぶな。

千花「うわ、凄いじゃん、さすが風間君！！」

真与「犯人逮捕に貢献なんてクラスの誇りですね！」

ひとつとらえた理由がなければの話しだが……誇るに誇れんだろ。

スグル「だからなんだってんだ。いちいち騒ぎやがって。どっちかつつーと痛い部類じゃねーかよ」

賑わう女子に対し、大多数の男子はおもしろくなさそうだ。  
器のちいせえやろつどもだな……そんなだからお前らはキャップ

に勝てないんだよ（勉強面では勝てる）

満「なんとまあ、いつもながら目立つ人だね」

城「いい意味でも悪い意味でもな」

我らがリーダー風間翔一は自由すぎる男だってことだ。

で、時は過ぎ……放課後

城「ユキ。俺はこの後モロたちとゲーセンに行くけど、お前はどうすんだ？」

帰りのHRが終了し、帰り支度をしているユキに今日の予定を聞く。

小雪「んー、僕はマヨと千花と一緒にクレープを食べに行く」

廊下側を見ると、こつちを楽しそうに見ている委員長と小笠原がユキが来るのを待っている。

どこにも楽しい要素がないと思うんだが……まあいいや。

城「そうか。夜はどうすんだ？」

ついでに夜のことも聞いておく。こっちで夕食を食いに来るのかな。

小雪「城と食べる！」

教科書を鞆に入れていた手を止め、俺に顔を向け迷いもせず元気良く答えるユキ。

俺はユキの頭に左手を載せる。父親が娘を気にかける気持ちがなんとなくわかるな。

城「了解。じゃ、あいつらも待たせてることだし俺は行くわ。楽しんでこいよ？」

委員長たちとは反対側の扉の方に、モロとスグル、それにヨンパチが待っている。

あんまし待たせるとなんか言われるからな。

小雪「うん！」

屈託のない笑顔で頷くユキに見送られながら、俺は教室から去った。

育郎「来たなこの男の敵め！」

合流した直後にんなことを猿に言われた。  
なんだなんだ？



城「なにを言ってやる」

スグル「嘆かわしい！たいへん嘆かわしいぞ！城お前は2次元のみを愛する者だと思っていた！だが、現にお前は3次元の女と……このリア充が！！」

城「はあ……？」

こいつら……俺とユキのことを誤解してやがんな。

城「何度も言ってるが、俺とユキは幼馴染だぞ。恋人とかそんなじゃない」

育郎「どう見たって付き合ってるようにしかみえねーよ。榊原は他の男に対する態度とお前との態度が全然ちがうじゃねーか」

城「ユキは俺に懐いてるだけだ。あっちも恋愛感情なんて持ってねーよ」

卓也「ユキは昔から城にべったりだったもんね。ファミリーに入り始めの頃は城と一緒にないと話さなかったしね」

あの頃のユキは虐待を受けていたから、自信と言っものが薄れていたんだよな。

そう考えると今のユキは大分変わったよな。

……いい意味と悪い意味両方含めて。

育郎「あのAAAランクの極上女子と付き合わないなんてどうかしてるぜ。俺が一条だったら、コクった初日に（閲覧禁止）」

スグル「三次元のなにがいいんだか。リアル女子は喧しいし我が儘で  
すぐ愚痴るしよ。それに比べて二次元の娘は（長いので中略）素  
晴らしい!!」

卓也「おーい、置いてくよー」

自分の世界に飛び立っているバカ×2を廊下のだ真ん中に放置して、  
モロと先に行く。

育郎 & a m p ; スグル「ま、待ってくれ!!」

慌て追いかけてきた。

………俺がユキとねえ。人生なにが起こるかわかんないからな。  
可能性の一つとしては……あるかもしれないかもな。

## 2・Fの変人集団と俺（後書き）

終了時イベント

城「一条城の一問一答シリーズ始まるぜ！」

小雪「はじまるぜい！」

城「このコーナーはパーソナリティーが（今回はユキ）適当に手紙に書かれた質問、悩み事なんかを俺か」

百代「唯我独尊最強美少女の私がズバツと答えてやる！」

小雪「ぱちぱちぱちぱち」

百代「その前にタイトルに私の名前が入ってないとはどういうことだ。むさい男子なんかより、ピッチピチの女子高生の名が入ったほうが視聴者受けがよくな」

城「この企画は趣味でやるにすぎないんだ。多くの人に聴いてもらうんじゃないで、やるからこそ意味があるんだ」

百代「なんだよ、私はかわいい女の子からファンレターとか手作り菓子を貰った方がいいんだが」

城「じゃ、ユキ記念すべき一枚目を読み上げてくれ」

百代「強引に話しを進めたな」

小雪「ほーい。うーんとペンネーム『マッスルマウンテン』からの  
お便りだよ」

百代「これを送ったあの筋肉バカだろ。なにが筋肉の山だ」

小雪「『ブラッド先生は時々この小説を書いたことを後悔に思った  
ことがありますか?』」

城「……………」

百代「……………」

小雪「だってさ」

百代「うおい!これ私たち宛じゃなくて、作者宛の質問だろ!」

城「一枚目が身内のやつからだとはな……………」

小雪「どーするの?」

百代「どうもこうもないだろ。私たちじゃなくて作者に答えて  
」

城「いや俺が代わりに答える」

百代「おい!いいのかよ!」

城「作者に為りきって答えればいいんだ。ではズバツと答えてやる  
!」

百代「ズバツと答えるべきではないだろ……」

城「『ああ後悔してるさ！こんなクソ文書してるなら一人あやとりしてたほうがよっぽど有意義だ！！けどな、やらないで後悔するよりやっってから後悔したほうがスッキリするだろ！！』」

百代「作者の性格じゃないだろ」

小雪「在り来たりー」

城「手厳しいな」

小雪「あ。そろそろ終わりの時間だよ」

城「もうそんな時間か……始めてにしては上々だったな」

百代「どこがだ……こんなぐだぐだでいいのか？」

城「少しばかり適当なくらいがちょうどいいんだ」

百代「適当すぎんだろ……」

城「それじゃ読者のみんな。次回は本編で会おうな」

小雪「ばいばーい」

百代「……時間を無駄にただけだったな。それとギャラはいつ振り込  
」

城「お疲れ様でしたー  
ー  
ー  
ー!!」

ネギで始めに思いつくのがボーカロイドってやばい？(前書き)

タイトルまったく関係ありませんww

ネギで始めに思いつくのがボーカロイドってやばい？

城「さーて、これからどうする？」

目的地のゲーセンに着いた俺たちはどの台から始めるか色んな種類の台を見極める。

卓也「自由でいいんじゃない？待ち合わせ場所と時間を決めて、集合。どうかな？」

育郎「俺はいいぞ。脱衣系にギャラリーがいると集中力が切れるかな」

堂々と言うお前は尊敬に価するぜ……悪い意味で。

スグル「ふっふっふ、アロエちゃんが俺を呼んでいる……同士よ、一足先にプレイしてくるぞ」

育郎「じゃあ俺は脱衣コーナーに行くか。集合は一時間後でもいいかな？」

城「ああ。あのヲタ眼鏡にも伝えておいてくれ」

育郎「おうよ。また後でな」

俺とモロがその場に残される。

城「俺は札しかないから、小銭に崩してくるわ」



卓也「そつか。僕は格ゲーコーナーの辺りにいると思うから、時間があつたら対戦しようよ」

城「q m aをやってからならな」

卓也「うん。じゃね」

モロはB G Mやら人の騒ぎ声の混じった喧騒の中へと走っていった。一方の俺は人気のない不気味なくらい静かな両替機に足を向けた。

城「千円でいいか」

紙幣挿入口に漱石さんを漱石をミンチにして、十枚の貨幣にへと変わり果てた姿に代えた。

硬貨をサイフの中にしまい、俺もq m aをプレイしにいくと

ナンパ男A「なあなあ、嬢ちゃんよお。いい加減諦めて俺たちと良いとこに行こうよ」

する前に横の方から下品めいた声が聞こえた。

……こんなところでナンパか？

絡まれてる女性A「しつこいぞ。此方たちは貴様らのような下賤な輩と過ごすつもりはないと言っておるじゃろう」

ナンパ男B「は？げせ……なんだって？」

絡まれてる女性B「どうやら頭だけじゃなく耳も悪いみたいです。何度も言わせてもらいますが貴方たちの誘いは断らせていただきます」

す」

ナンパ男A「こ、この…人が下手にでていりゃ調子に乗りやがって！！」

なんかナンパ野郎たちがヒートアップしてきてんな。女側の方も相手を馬鹿にするように挑発してるし。どちらも随分と強気だねえ。これは一悶着起こりそうだな。

ナンパ野郎たちは見るからに女好きプレイボーイみたいな容姿をしている。冬馬よりださいが。

んで、制服からして他高生か。アホどもに絡まれてる不幸な相手は……こっからじゃナンパ男たちが壁になって見えないな。

ん？なんかカウンターにいる係員が受話器を片手に構えているな。いつでも警察に通報できるための準備は整ったってわけか。

ナンパ男A「おら！こっちにきやがれ！！」

やれやれ……見て見ぬ振りをするのには遅すぎるな。めんどろだが首を突っ込ませてもらおうかね。

絡まれてる女性A「此方たちが女だと思って舐めていると痛い目を見るぞ！」

ナンパ男B「へっ、それはこっちの台詞だつての！女だからって手を上げないと思ったら大間違」

城「女に暴力を振るう腕はこの腕か？」

殴ろうとし、腕を振り下げる前に後ろから腕を掴む。

ナンパ男B「いだだだだだだだ！な、なにしゃがんだ！！」

城「てめえこそこんなところでなにをしてやがる。ここはゲーセン、ナンパや喧嘩をするところじゃないんだよ」

掴んでいた腕を振り払い、なんとも型になってない武道もどきの構えを取る軟弱ナンパ野郎。

それにしても今日はやたらと不良もどきと会おうよな。……これも俺の運の悪さか？

ナンパ男B「んだと！てめえボコボコにして」

ナンパ男A「待て！」

軟弱ナンパ野郎の片割れのビジュアル系男が、軟弱君を制す。

ナンパ男A「こいつどつかで見たことがあると思ったら、あ的一条城だ！」

ナンパ男B「なにっ！？あの川神百代を凌駕するほどの強さをもつ！？」

……俺って県内だと有名なのか？

ナンパ男A「ここは殺されないためにもさっさと逃げ出すぞ！」

ナンパ男B「あ、ああ……」

ここそと男たちはゲーセンから立ち去っていった。その背中を見て、モデルガンで打ち抜きたいと思ったことは秘密だ。

カウンターの方を見てみると、係員さんが「良くやってくれた!」  
と言わんばかりに超言い笑顔で親指を立てていた。

……なんか近頃ああいふ連中が増えてきているな……川神市の警戒  
態勢の質が低下してきたのかもしれない。

城「あつ、あんたら大丈夫だったか?」

絡まれていた女たちのことを思い出して、男たちがいたところに向き  
直ると

女性A「一条……か?」

女性B「一条先輩?」

着物姿の女と川神学園の制服を着た一年生が目丸くして、俺の名  
を呼んだ。

………なんでゲーセンなんかにいんすか?

着物女「なぜお主がこんなところにいるのじゃ? もしや、此方の執事  
だということに自覚を」

城「そりゃこっちの台詞だ。なんでお前みたいな名門家のお嬢様が

ゲーセンなんかにいんだよ。後、俺はお前の執事になった覚えはない」

不死川「つれないのう。不死川家の系列に入るだけでも人生は薔薇色じゃというのになにが気に入らないのか……」

この年で人生の設計図って早すぎだろ。俺はまだ青春を謳歌したいんだ。

やたらと俺を自分専属の執事にさせたがる年中着物姿のこいつは、冬馬や準と同じ選ばれし者たちS組の不死川<sup>ふしかわ</sup>心<sup>こころ</sup>。

不死川の名は九鬼には負けるが、世界でも五本の指には入る名門家で、こいつはその一人娘ってわけだ。

なぜそんなやつが俺を不死川家に引き込もうとしてるのかって？去年の秋頃に町で柄の悪い連中に付きまとわれていたのを、たまたまそこに居合わせていた俺が追い払ったら……俺が不死川に付きまとわれる羽目になったわけだ。

好意を持たれるのは悪い気はしないが、会う度に執事執事と言うのはやめてほしい。

川神学園の制服娘「あ的一条先輩、お久しぶりです」

一通り不死川と話し終えたら、アホ毛が特徴な女の子に話しかけられた。

お久しぶり？ってことは俺前にこの子とあったことがあるのか。だけど俺の記憶には……

川神学園の制服娘「……もしかして、覚えてませんか？」

城「そそそ、そんなことないぜよ！ちょっと思い出すのに時間が掛

かってるだけで……」

川神学園の制服娘「口調が変わっていますよ」

見知らぬ（向こうは俺のことを知っている）女の子の機嫌が悪くな  
ってくるのがわかる。

思い出せ……思い出すのだ！このアホ毛とアホ毛とアホ毛と後輩が  
特徴的な……ん？アホ毛？年下？

……あ。こいつはたしか……

城「思い出した！お前は中学時代で俺に難癖を付けて勝負を挑んで  
きたのは良いけど、あっけなくユキに拒まれ、俺に触れる前にやら  
れた宮本か！」

宮本？「酷い思い出し方ですね。それと私は宮本ではないです。武<sup>む</sup>  
蔵<sup>さし</sup> 小杉<sup>こすぎ</sup>ですよ」

おお。間違つて伝説の剣豪と勘違いしてしもうた。  
でも、おしいよね？

城「あー……武蔵か。お前川神学園に進学したんだな」

……あれ？そういやこいつ、他の県内の校に進むとか言っ  
てなかったけ？

小杉「え、ええ。まあ……（先輩と一緒にのところが楽しそうだから、  
なんて口が裂けても言えない）」

およ？ちよいと顔が赤くなってやせんか？

不死川「なんじゃ。2人は知り合いだったのか」

小杉「は、はい。先輩は忘れていたみたいですけど、中学校の時の先輩で時々私に武術を伝授してくれたりもしたんですよ」

ユキにテコンドーを教えているついでにだっけ？1人2人増えようが大した労力にはなんないし。

城「忘れてなんかなかっただろ。ちょっと名前を間違えていただけで……」

小杉「人の名前を間違えるのは忘れていた証拠です」

心「男と女。性別すら違うではないか」

すみません。ちよっぴし見栄を張っていました。

城「……で？なんでの名門家不死川と一般庶民の武蔵がゲーセンにいった？繋がりがないもなさそうなのに」

小杉「あ、私はS組みですよ。入学式の時にお世話になったので」

心「ゲーセンというものに連れてきてもらったのじゃ。此方はいくつという雰囲気が始めてで、胸がとつても躍っておる」

そついうことか。不死川がおいそれとゲーセンに来れるはずがないもんな。

ウキウキとしている不死川は子供が新しい玩具を手に入れたみたいで面白い。

小杉「そういう先輩は1人で遊びに来たんですか？」

城「んな寂しいやつじゃねーよ。クラスのメンバーと新作アーケードをやりに来たんだ」

モロとヨンパチは違うが。

心「ふむ……よし！決めたぞ！此方がそのゲームとやらに挑戦してみるのじゃ！もちろんお前たちも来るのじゃ！」

城「えー……き「ない！さあ早く案内せい！」一文字しか言っていないだが……」

きだけで、拒否権ってわかるのか。

なんつーエゴイズム。なんで、俺の周りの女は最後まで話を聞こうとしないんだよ。

俺は不死川に引きずられながら、qmaの台がある場所まで指示した。それを後から追ってくる武蔵の目が「苦労してますね」と同情の視線を送って来た。

……だりい。

心「クイズマジックアカデミー……か。どついうゲームなのじゃ？」



イスに座って画面を見つめる不死川。その両サイドに俺と武蔵が待機している。

城「タイトル通り、次々に出されるクイズに答えていくゲームだ。ジャンルは様々。問題の収録数はざっと7万は越える」

小杉「結構豊富なんですね」

城「しかも、自分のランクが上がっていくごとに問題の難易度も上がる。正直言って、S組みのお前らでも答えられるとは限らんぜ？」

挑発するように言ってる。

心「おもしろい。それは此方たちの挑戦じゃな？」

小杉「いくら先輩でもその台詞は聞き捨てなりませんね。私たちの実力を証明してさっきの言葉を撤回させてもらいます！」

なんとも予想通りの返しをしてくれる。少しは冷静になることも覚えましょう。

城「まあ、頑張りな。俺はドラゴン組み……最上部までいったが。はたしてお前たちはどこまで進めることができるかな？」

初めてということ、2人で協力してプレイすることとなった。

不死川「なにになに……好きなキャラクターを選択してください？」

城「ま、誰を選んでも特に問題に影響があるわけじゃないからな。

適当でいいと思うぞ」

ちなみに俺はユリをマイキャラとしている。男キャラでも良かったのだが、スグルになぜか怒られたので、こいつを選んだ。

小杉「どうします？不死川先輩」

心「そうじゃな……このシャロンという女にしてみないか？彼女を人目見た時なにかが通じ合う様な錯覚に陥った感じがしたのじゃ」

小杉「奇遇ですね。私も最初からこのキャラに目をつけていました」

心「では決まりじゃな」

ポチつと不死川がボタンを押し、画面が切り替わる。

小杉「キャラクターの名前を入力してください……プレミアムというのはどうでしょう？」

心「なにが貴重なのかわからんぞ。普通にデフォルトでいいじゃろ」

シャロンとカタカナで打って、決定を押す不死川。

武蔵は「私はプレミアムに好きなんだけどな……プレミアム……」とちよつと残念そうだった。

口癖をキャラに名付けるのはどうかと思うぞ。

小杉「モードを選択してください」

城「初めてなんだし、予習からでいいんじゃないか？」

心「此方たちは選ばれし者じゃ。上に立つものが低レベルなことにチャレンジしてもなんの意味がなかるう。ここはトーナメントにエントリーするのじゃ！」

人のアドバイスを無視して、いきなりトーナメントを選択しやがった。

城「いいのか武蔵？お前の意見を聞かずに勝手に進めているが」

後ろで不死川に聞こえないように話す。

小杉「……力関係は私の方が下なので、あんまり生意気なことは言えません」

嫌なことを思い出したのか、眉を潜める。

城「あの時の O H A N A S H I で学んだようだな」

ビクつと O H A N A S H I の言葉に過剰に反応する武蔵。さっきの武蔵との邂逅話だが、もうちょっと続きがある。ユキのとび蹴りをくらって気絶した武蔵を俺とユキは屋上に連行したのだ（もしもユキを連れていかなかったら、俺の沽券に関わるためだ。意識がない女の子を担ぐ男子生徒は傍からみたら、犯罪行為をしようとしているとしか見えない）

目を覚ました武蔵は敗者だというのに、生意気なことを言ってきたので、ユキと一緒に……をした。

……が気になる人は作者にでも聞いてくれ。とても俺の口からは言えねえ……それでも答えてくれるかはわからんが。

小杉「……もう二度とあんなな目はごめんです」

青ざめた顔で言う武蔵。ブルブルと震えているのは見間違いではない。

心「まずは出題形式を選んでください……なんなのじゃ？」

武蔵と過去の思い出を穿りかえしていたら、不死川が俺に説明を求めてきた。

城「まずはセレクト総合を選ぶんだ。これはその名の通り ×問題と選択問題が出題される。初心者には持ってこいのレベルだ」

タイピングは俺でもキツイからな。いきなりマルチを選ぶことなんて不死川でもさすがに

心「そうか。ならこのマルチセレクトというやつに」

小杉「不死川先輩。ここは一条先輩のチュートリアル通りにしましょう。プレミアムに酷い目にあわされますよ？」

不死川がまたアドバイスを無視して、マルチを選択しようとする前に武蔵が先にセレクト総合にタッチした。  
つか、最後のはいらんだろ。

心「別にいいが………武蔵顔が真っ青じゃぞ？」

小杉「ちよつとこのゲームセンター冷房が効きすぎですね」

城「苦しい言い訳だな」

まず冷房じたい付いていません。

モロたちに急用があるから帰ると嘘をついて、俺たち3人はゲーセンから出て、通学路に通る川原を歩いている。不死川と武蔵とこの川原を歩くとはな。世の中なにが起こるかわからんな。

小杉「ん~~~~楽しかったー」

空高く腕を伸ばす武蔵に

心「ふふん　みたか一条此方たちの実力を！」

上機嫌でない胸を張る不死川。  
うん。悲しいくらいに断崖絶壁だ。

心「む！今此方のことをバカにするようなことを考えておらなかったか？」

城「気のせいだ」

俺の哀れみを込めた視線に気づいたのか、ムッと睨んできた。  
女の勘ってやつか？

城「それにしても、改めてお前らS組の凄さを認識されたぜ……」

こういう時は話を逸らすにかぎる。そうすりゃ、大概のことは切り抜けられるからな。

で、こいつらはqma初見プレイの癖に全問正解でトーナメントを優勝した。なのに、まだ満足しきれなかった不死川と武蔵はもっと上を目指したいらしく、さらに高ランクのトーナメントに参加して……優勝。俺も恐れ入ったぜ……

小杉「勉強の成果ですよ。S組みだから勉強に力を入れてますから」

心「そうか、此方の事を見直したか。それならば此方のし「お断りします」むー！なぜじゃ！」

城「めんどい」

心「そ、そのような理由で………じゃが、此方は決して諦めぬからな！お前を此方の伴侶にするまでは！」

待て、執事から伴侶に変わってないか？俺そっちの方が嫌なんだが。まだ人生の墓場に行きたくないです。

心「一条、武蔵、此方はここで失礼するぞ」

そう言うと、高級ポルシェが俺たちの前に止まった。すげ……この車売れば1000万は軽く超えるだろ。

執事らしきじいさん「心様。お迎えに上がりました」

心「うむ。くくるっ」

助手席に乗り込む不死川。

心「一条、武蔵。よければお前たちも乗るか？家まで送って行つてやるぞ？」

俺と武蔵は顔を見合す。

城「俺はいいや。あとちょっとで着くし」

小杉「私は乗せてもらえるなら、よろしくおねがいします。少し……不死川先輩と話したいことがありますし」

心「ほう……此方も武蔵に聞きたいことがあつたのじゃ。遠慮せずに乗るといいぞ」

小杉＆心「ふふふふふふ（ほほほほほ）」「」

……な、なんだこの妙な空気は？お前らの笑顔を見ていると肌がピリピリしてくる。

見ろよ、執事のじいさんなんてガタガタ震えていんぞ。

別れのあいさつを告げ、走り去り行くポルシェを見て俺は女つてこえーなと思った。

……つか、俺の周りの女つて武道家ばかりだよな……はあ。

城「今思えば俺、ゲーセンでなにもプレイしてなかったよな……  
んのためにゲーセンに行ったんだ俺」

不死川と武蔵のプレイを見ていただけだったな。収穫と言えば、久しぶりに武蔵と再会したことか（俺はあいつのことを忘れていたが）

城「ただいまー」

我が安息の地に踏み入れたと同時に

小雪＆翔一「おかえりー」

ユキと放浪バカが笑顔で出迎えてくれた。

……

城「いや……ユキはいいとしてなんでキャップが俺んちにいの？」

翔一「埼玉に旅行って買ったお土産を渡そうと思ってな。ほい」

ネギを渡された。

小雪「居間にトーマと準がいるよ」

城「あいつらもか？」



ローファアを脱いで、リビングに向かう。

冬馬「おや、城君。おかえりなさい」

準「よつ、邪魔させてもらってるぜ」

冬馬とハゲがチェスしていた。

……俺がいない間に色んな奴が着てるな。

翔「いやあ、警察から開放されるの遅くなっちまってさ。昼前には寮に帰れると思ってたんだけどな」

ドサッとソファアに腰をかけるキャップ。なんとも図々しい。  
ま、キャップだからいいけど。これが岳人が猿だったら殴り飛ばしてることだ。

城「警察ね……一生世話になりたくないものだな」

翔「でもよ、案外面白い人たちだったぜ。俺が埼玉って良いところですねって言ったら喜んじやって彩の国の良さを語られたよ」

城「てかさ、なんで埼玉にいたんだ？」

翔「バイト先の人が埼玉出身で。ネギとか牛とか特産品の話に興味そうにするんだよな」。で、ふと食いたくなって土日使ってフラット風のように旅に出たってわけ」

いつもの放浪癖かいな。

冬馬「旅ですか……いいですね、男性のロマンですよ」

翔「おうよ！冬馬はわかってんじゃねーか。城を旅に誘えば「疲れるからいやだ」って断るんだぜ？ありえねーよ！」

城「金もかかるし、そう何度も行つてられつか。……ん？冬馬？なんだお前らもう仲良くなったのか」

準「まあな。元々風間とは時々話してたしな」

翔「S組みのやつは俺たちを見下すばかりだと思つてたんだが、こいつらは別だ。ユキの友達で高圧的な態度でもないしな」

小雪「準は腰が低すぎるけどねー」

準「仕方ねーだろ。あのメイドに逆らつたら………殺られる」

メイドといえば、あの腹黒女しか思いつかない。傭兵と一般市民だもんな。戦つたら間違いなく市民は奴隷にジョブチェンジすることになる。

翔「それより城ー腹が減つたーなんか作ってくれよー」

小雪「ぼくもーおなかすいたー」

じたばたじたばた。

駄々をこね始めた。お前ら幾つだと思つてんだ。

冬馬「私もチェスをしていたら小腹が空いてきましたね……よろしければなにか作ってもらえませんか？」

流し目はやめれ。

準「頼むぜ城。これをお前に貸し手やるからさ」

城「……CD？」

準「おうよ。幼女に愛され眠れないシリーズvol.2だ  
おい！捨てようとすんな！高いんだぞ！」

う

城「ヤフオクに出品すっかな」

準「人が貸したものを売ろうとすんな！！」

城「安心しろ。一割冗談だ」

準「本気ってことじゃねえか！？」

小雪「じょうゝハゲなんか相手にしないでござんゝゝ」

準「なんかって……酷い」

翔「そうだーハゲより飯を作ってくれゝ」

準「ハゲハゲ言うな！この髪型気にいってんだぞ！」

髪ないじゃん。

小雪＆翔「「「じょうゝおなかすいたゝゝゝ」」」

育ち盛りの雛がさらにバタバタし始めた。

冬馬「私もお腹が空きましたよ」

準「めし〜〜めし〜〜」

さらに雛が増えた。お前らまで便乗してんじゃねーよ。

城「はいはい……わかったから静かにしてる。キャップに貰ったネギですぐにチャーハンを作ってやつからよ」

小雪&翔「わーい！」

ごろごろごろ

城「だから転がんな！作ってやんねーぞ！」

準「そう言いながらも飯を作ってやる城であつた」

城「勝手なモノログ入れてんじゃねーぞハゲ。チャーハンに王水いれんぞ」

準「入れんな！！死ぬからな！！」

俺が読んてるラノベだと生きてるんだけどな……ハゲには実験台になつて欲しかった……残念

冬馬「現実と二次元はごちゃごちゃにしてはいけませんよ？」

声に出してないのに、心読まれた。

こうして夜は更けていく……

ネギで始めに思いつくのがボーカロイドってやばい？（後書き）

もうわかっている人はわかっていますが、この小説のヒロインは基本サブキャラです。

心と小杉の性格は原作に比べ、少し丸く納まっています。

運命の罰ゲーム！……邪気眼とか写輪眼ってあこがれるよね？（前書き）

うお！4ヶ月ぶりの投稿かよ！

自分でもほったらかしすぎたかなあ……スマソ！！

そっういやS！の発売が決まったんだっけ。

うゝん……ユキはヒロインに追加されるんだろうか……伊予はなんかCGがあっただけ……どうなんだろうねえ……

運命の罰ゲーム！……邪気眼とか写輪眼ってあこがれるよね？

翌日…… 4月21日。

いつも通りユキに叩き起こされ（今日は英和辞典を腹に落とされた）  
、今日も2人でだるい学校に向かう。

小雪「スイスイ」

俺の前をローラースケートで滑走するユキ。  
何年前か前、榊原老夫婦に買ってもらったものを押し入れから引っ張  
り出してきたようだ。

城「人様に迷惑かけないようにな」

小雪「わかってるよー。イエイ、トルネードスピン」

プロスケーターでさえ、困難なトリプルアクセルを決めるとは……  
俺だけじゃなくて、ユキも十分チートだよな。

城「やれやれ……朝からなんであんなに元気なんだ                    ってお  
いユキ！前前！ー」

小雪「ん？」

ゴチー……ン！！

電柱に頭をぶつけた！ーうわぁ……めっちゃ鈍い音がしたよな……  
あれは痛い。



城「お、おい。大丈夫か？」

その場でうずくまっているユキに駆け寄る。

小雪「うゝゝへーき……ちょっと頭がパーンってなっただけ」

城「それは大丈夫じゃないだろ！」

普通だったら、「額をぶつただけだから」とか言うだろ！ただでさえ、ユキの頭の中は童話に出てくる小人が住んでいるってのに、これ以上アホの子に磨きがかかったら手のつけようがなくなる！

小雪「失礼なこと考えてる？」

額を押さえながら、半眼で睨んでくるユキ。質問には答えず、ユキの手を引っ張り起き上がらせる。

城「まったく……前方不注意だな。周りに気をつける以前の問題だろ」

小雪「聖徳太子のことに気を取られすぎちゃった」

城「なぜに聖徳太子……」

スピン中に名言でも思い浮かべていたのだろうか……謎だ。

そんでもって、いつものとこで大和たちと合流をする。今回はキャ

ツプも、そしてゲンさんも一緒である。

翔「ふぁーあ。その川辺で昼寝してかね？」

大「それ昨日の俺も思った」

城「いいな。こんないい天気にあんな狭っ苦しいコンクリの中で勉強なんかしたくねーもんな」

小「日向ぼっこするならばくもするー！」

翔「お、話がわかるな。んじゃ、そーしよーぜ。たまにはいいだろ」

俺、ユキ、キャップの3人で川辺まで降りようとしたが

忠「なにしようとしてんだ。遅刻すんだろが」

卓「たまにつて……城とキャップはそんなのばかりでしょ」

ツンデレと地味に引き止められた。

城「あの大阪城を建築した豊臣秀吉は言いました……」「戦地（学校）に行くならコンディション（睡眠時間）がベストの状態で行け」と

卓「そんなこと秀吉は言っていないでしょ」

京「それに、その時代に外来語はないよ」

知ってるわ。ガチツツコミ сенでいい。

翔「なんだあ。みんな良い子ぶつてよー。本性曝け出そーぜ」

岳「今日は一時限目が体育で、俺様見せ場だしな」

城「お前の数少ない取り得だもんな。それでも、女子に注目されてることはないが」

小「体毛の多いゴリラなんて見たくないって、千花が言ってたよー」

岳「うおおおおおおお！！俺が必死に目を逸らしていた事実をあつさりと言いやがったーーーーー！！」

卓「容赦ないね2人とも……」

頭を抱えて、魂の叫びをあげる岳人。もてないってことは自覚していたんだな。

いや、明確すぎるから自覚してなかったら、どうかと思うが。

翔「むう、みんな乗り気じゃないのか。なら、同士を呼ぶか！誰か笛持ってきてる？」

みんなに呼びかけるキャップ。

京「当然。ブリーダーには必需品」

大「俺も持ってる」

岳「俺様も。面白いからなこれ」

卓「うん。僕も持ってるよ」

小「あるよー」

忠「……あいつを動物扱いするのは気が引けるが……一応持つてきてるぜ」

携帯電話で連絡を取るより、楽で早いからな。みんなが持ち歩いて  
いるのもわかる。

大「城は？ 持つてきてないのか？」

城「自室の机の上に寝かしておいてある」

卓「つまり、忘れてきたんだ」

そうとも言つ。てか、そうとしか言わないか。

なんか、こう言った方がカッコよくないか？ なんの脚色もなく「家に忘れてきた」と言うよりも忘れたって言葉を使用しないで言うとか相手になんか事情があったのかな？ と思わすこともできなくもない………はず。まあ、ファミリーたち長年の友人には即刻バレるけどさ。

翔「ワン子呼んでくれ」

大「じゃあいくぜ」

大和が笛を鳴らし、周囲に染み渡った。

音が鳴り終わる頃には、駆け足の音にシフトした。

卓「さっそく来たよ」

その音の主のワン子が軽快な足音と共に走ってきた。

―「呼んだー！ー！？ていうか、おはよー！」

朝から元気にあいさつなのは良いんだが、もう少し声のボリュームを下げしてほしい。

頭がくらくらするだろ……

翔「ようワン子。おはよう」

―「あら、変な意味で有名人じゃない」

翔「俺が？そうなの？」

昨日ＴＶに映っていたじゃん。

―「アンタのせいで牛乳少し無駄になったのよこの！」

翔「いきなり理不尽な理由で蹴られるとかどんな教育？」

―「川神院的教育、肉体言語で語るのさ」

話し合いをしるよ。暴力で訴えようとすんなや。

翔「そーいやそうだった。ともかく笛吹くとすぐ来る習慣は偉いぞ、いい味出してる」

―「なによ。アンタたちがそーいう風にしたんでしょ」

俺たちにも非があるっちゃあるが、まさか本当に身につけるとは思わないだろ普通。

お前の前世は間違はなく犬だろうな。種類は………チワワ？いや、こいつはわんぱくすぎるからな。

うーん……バカっぽい犬か。……バカでアホでやんちゃすぎる犬ってなんだろうな？

ー「ちょっと城。なんか物凄い失礼な事考えてない？」

犬ががると牙を向けてきた。さすがは犬。直感も人間よりも優れているみたいだ。

城「考えてないぞ。ほれ、ちゃんとやってこれたご褒美だ」

機嫌直しにビーフジャーキー（犬用）を渡してやった。

ー「わーいわーい、肉だー。ありがとー」

中を開封し犬用のおやつをかみかみと啜える一子。

忠「……おい一条。あれ犬用のだろ？」

城「ああ。一子は気づいてないみたいだな」

ゲンさんが小声で聞いてきた。

当の本人は幸せそうにビージャ（ビーフジャーキーの略）を咀嚼していた。

翔「今の気持ちを英語で表してみてくれ、ワン子」

一子「……いんぐりっしゅ？」

英会話が始まった。

忠「そんなもん渡すな。腹でも壊したらどうすんだ」

咎められるような睨みを利かしてきた。

結構な威圧感があるな……伊達に裏の仕事はしてないってわけか。

城「問題ないさ。袋には犬用と記されているが、中身はちゃんと人用だ」

酒のつまみ用だけだな！

忠「んなことしないで、未開封のままのにしとけ」

城「そんなのじゃつまらんだろ。気づいたときのワン子の反応が面白そうだし」

忠「……アホか」

どうにも、ゲンさんはワン子のことになると厳しくなる……まあ、元からキツメだけどそれが一段と増すというか……なんでだ？俺がユキを放っておけないように、ゲンさんもワン子のことか心配なのだろうか？うーん……いくら考えてもわからん。ま、別にいいかこんなこと。

一「べ、ベリーベリーデリシャスミート……アイアムスーパーデリシャスハッピー？」

訳すと『私はとても美味しくて幸せです』

……こいつは食材かなにかなんだろつか？

岳「お前馬鹿だよなあ。恥ずかしいやつだ」

ー「あははっ！ガクトに言われたくないわね！」

卓「バカっぽいなあ」

京「実にバカ」

小雪「ー？ー、ワン子は？だー」

城「他の誰よりもバカだなお前は。まさにキンブオブザバカの名にふさわしい」

忠「あー、そのなんだ……強く生きろよ」

ー「……な、なんだよお……イジめるために呼んだの？」

みんなでバカコール（ゲンさんは慰め）され、気が削がれ涙目になるワン子。

大「取りあえずキャラメル系を食え系で」

ワン子の口に押し込む大和。

ー「むぐむぐ系。おおこれはこれで美味しい系」



なに？近頃は語尾に系を付けるのが流行ってんの？

前世の時の年齢と転生してからの年を計算すると俺の精神年齢は三十路超えか……この世界で死んだらまた転生するのだろうか？

見かけは大人。精神と頭脳は老人！……そんなのは嫌だ。

百「みんな揃ってるな。どした道端で」

ワン子のバカっぷりを観察してたら、モモ先輩がやってきた。

岳「はて、これもととなんの話しだっけか？」

大「ワン子、バカって言い返すチャンス到来だぞ」

ー「ぐまぐま」

大和の呼びかけに気づかずジャーキーとキャラメルを頬張る犬。  
肉と甘いもんを同時に食うなよ。見てるこっちが気持ち悪くなってくるだろ……

翔「……みんな揃っちゃったし登校するか」

卓「うん。サボって鬼小島に目をつけられることないよ」

岳「4月で担任として張り切っているだろうしな」

城「なら、俺は問題ないな。既にロックオンされてるし、どれだけ好き放題に行動しても咎められることはないだろうしな」

男らしいぜ俺！

グルッと家の帰路につこうとしたら

忠「どこに行こうとしてんだ。そっちは学園じゃねーぞ」

小「まわれー左っ！」

ゲンさんに肩を掴まれ、ユキに180度回転させられた。  
逃走は失敗した！くそう……相手の方が素早さが上だったか。

大「よし行くぞ」

翔「大和、号令はキャップたる俺の役目だ。さあ、行くぜ狂乱麗舞、  
風間ファミリー出陣だ！ワン子、先陣を切れ！泣く子がいれば黙ら  
せろ！！」

城「ふむ。キャップは泣き喚いている子供がいたら、無慈悲に蹴っ  
飛ばしてまで突き進もうと」

ー「任せなさい！アンタらアタシに続けーっ！」

ワン子の馬鹿でかい掛け声に遮られた。

……………帰りたい。

京「ん？橋の上に誰がいるよ。こっち見てる」

9人の大人数で橋を渡つてると、前方にきな臭さそうな男が橋のど真ん中に突っ立っていた。

他の生徒がうざったそうにして、迂回している。  
こっちみんなじい。

百「男か。……武道やってる人間だな」

ワ「お姉さま目当てじゃないかしら？」

小「こんな朝早くから来るなんて、きつとあの人ニートなんだろうね」

京「また挑戦者…か」

百「面白い。昨日のヤツらじゃつまらなかったんだ」

あんだだけテトリスで遊んだのに（人間で）物足りないと申しますか。  
これだから戦闘<sup>バトルマニア</sup>狂

は……。少しは平穩に生きようとか思わないのかねえ。面白い事は好きだけど、疲れるから戦うのは嫌いだ。特に誰かから挑まれたときは。

男「貴方が一条……城君？」

言ったそばからかよ。

モモ先輩じゃなくて、俺が目当てなのか。

城「……………」

相手にするだけ無駄なので、さり気無く横を通ろうと

男「ま、待ちたまえ！無視しないでくれ！！」

腕を掴まれ阻止された。

うぜえ……振りほどいて、川に投げ飛ばしてやろうか？

城「（ちっ死ねばいいのに……）確かに俺は一条だが……なにか用か？」

手短にすませろ。5秒以内にだ。

男「え、ええ。あの川神百代を倒したと言われる貴方とお手合わせがしたいのです（今舌打ちされたような……）」

後ろから凄い殺気を感じた。この武道家らしき男の発言に腹を立てたのがわかる。

目の前の男より仲間であるモモ先輩の方が怖い……

雲「私は雲野重蔵。武の探求者だ」

誰も望んでいないのに、勝手に名乗っていくおっさん。

雲「高名な川神院の鉄心先生にお相手を願おうとしたところ、君が川神百代に勝てないと勝負を受けられないと」

百「……そういう仕組みになっている」

ぶずつと腕を組みながら言い放つモモ先輩。

なんで俺を睨んでくるの？俺は自分の意思でこの自殺志願者の獲物を奪ったわけじゃないんですよ？むしろ、差し上げます。

つか、あの老いばれ俺の許可無く、条件内にいれるのはやめろって  
言ってるのに……人の話はちゃんと聞けよなまったく……

雲「では！いざ尋常に勝負いたせ！」

城「断る」

ズルッ！

俺の返答を聞き雲野わ言わずとも、ファミリーのメンバーやギャラ  
リーがこけた。

雲「な、なぜだ！」

なぜと言われてもな……

城「めんどい、疲れる。朝から無駄な気力を消費したくない」

雲「な……そんな理由で……」

絶句するおっさん。

まあ、一番の理由は結果が見えているからだな。もちろん勝者は俺  
である。

京「相手が挑んできたら断る。でも相手が逃げ腰なら逆に追い討ち  
を入れる。城は天邪鬼」

大和「きまぐれなだけだろ」

翔「自分の本能の赴くままに行動する。城も将来冒険かになれば

いいのによっ

嫌だよ。

俺は宝くじで3億当てて、その金で豪華客船に乗って酔いまくると  
いう立派な？夢があるんだ。  
今考えたただけけど。

雲「……フツ……フッフ、フハハハハハ！！！」

急に笑いだしたよ……こいつあぶない。

城「ユキ、近くの病院に連絡してくれ。頭に大変な病気を抱えた人  
が一匹いるって」

小「はいよ」

雲「やめたまえ！私は頭がおかしくなったわけではない！！それと  
私を動物扱いしないでくれたまえ！！」

ちっ「……患者を一人紹介すれば10万貰えたのに……命拾いしたな。  
しかし、こいつ俺が相手にしなければどいてくれそうにないな、  
別に無視してもいいのだが、だんだんギャラリーが増えてきたし……」

城「はあ……気が進まんが相手してやるよ」

雲「ふっ……」

鼻で笑われた。

このじじい……今すぐこの橋から重しをつけて放り投げてやろうか

……

雲「川神鉄心、噂だけの男だったのかい！こんな平凡な気の抜けた学生と試合しろだと？正気の沙汰とは - -」

……決めた、こいつ処刑決定。

城「気の抜けた気……ねえ、なら、お前が求めている気ってのは……  
……こういう気のことを言うのか！？」

『！？』

少しだけ力を解放し、俺の足元からブワツと気が吹き荒れ、ファミリー以外の連中が俺の気に圧倒される。  
相手に隙ができた。

めんどうだしさっさと片付けるとしよう。

雲「ぬおっ！？……くそお！！」

瞬時に懷に移動した俺だが、さすがは武道家。すかさず拳を放ってくるが（やけにも見えるが）、屈めている俺には当たらず

ガシッ！！

背後からやつの腰をガツチリとホールドして

雲「な、なにをするつもりかね！？」

この体勢といったら……これしかないでしょう！

城「海老の真似〜！」

雲「ばげらっ！?!?!?!」

全力で仰け反り、やつの頭を変体橋にめりこませてやった。  
プロレス技というジャーマンスープレックスをかましてやった。

京「勝負あり」

審判?のジャッジが下ると野次馬の連中がわっと歓声を上げた。  
死んではないか確認を取るが、ただ気絶してるだけだったので、伸び  
ている雲……なんとかを放置してみんなの元に向かう。

城「ただいま」

小「おつかえり」勝利の暁にぼくを学校までおんぶする権利を  
」

城「いりません」

小「ぶう！つべこべ言わずにおぶれ！〜!」

城「そんな元気があるなら自分の足であるけるだろ!!」

京「大和私も「いやです」ぶう……大和のいけず」

卓「二人とも脈略がなさすぎるよ……」

意地でも俺に乘ろうとするユキの手をひらりと回避しまくる。  
遅い……遅すぎる……

急ぎの用事で自転車をこいでる時に、風向きが向い風に変わった中



でこぐスピードのように遅すぎる！

一「さすが私の師匠！ね、ね、さっきの移動術どうやるの！？」

小「ね〜む〜い〜、城早くぼくをおんぶして〜」

城「ええい！そうべたべたと触るんじゃない！」

百「そうだぞ二人とも。城をまさぐっていいのは私だけ……………お、中々引き締まった体だな…………」

城「あんたはどこ触ってたー……………！！！！！！」

京「城は今日もモテモテで大変そうだね」

卓「本人は気づいてないけどね」

翔「あつ、ずりいぞお前ら！俺も混ぜてくれよー！」

大「男女問わず城の人気は凄まじいからな。学園内でも」

岳「うらやましいな〜ちくしょう。一度でいいから城と俺の立場を交換してもらいたいぜ…………」

忠「そういうのは夢中でやってろ。うぜえ」

で、10人といった大人数で変態橋を渡る。

さっきの武道家？

勝負が始まったと同時にモモ先輩が川神院お墨付きの救護班を呼んでくれたらしい。

モモ先輩曰く、手段を選ばない外道たちには無慈悲な処刑が始まるが、ああいったちゃんとした志を持った武道家にはフォローをしてくれる。

大「あ、キャップ質問。俺またバイトしようと思っただけどさ」

翔「任せとけ。河相がバントなら俺はバイトだ」

俺にひつついてくる4人を引き離す作業のせいで、余計な体力を使っちゃった（主にモモ先輩）さっきの試合より疲れたぞ……

大「なんかワリのいいやつないかな？」

翔「骨折のバイトがあるぞ。腕一本数十万だぜ」

大「ワリよくねーよ！医療関係だろうが勘弁だ」

城「腕一本差し出すだけで10万か……けっこういいかもな」

外れた関節は自分でくつつけられるし。

小「そんじゃあ、ぼくが折ってあげる」

城「むやみにやらないでよろしい」

ユキが俺の腕に飛び掛ってきたので、腕を上げてひらりと回避する。

翔「ホモに追いかけて、捕まったら罰金というゲームに参加するか？」

卓「なにその闇のゲーム！」

城「捕まった後はきっと王様のマインドクラッシュが……」

—「????ウインドウズクラッシュ?」

忠「一子。前半の部分がおかしいぞ」

PC壊してどうするよ。

キーボードクラッシャーかお前は。

翔「2、3人捕まえると賞金でるらしいぞ」

岳「追いかけるほうなのかよ！」

岳人みたいな筋肉バカが参加するならともかく、大和のようなやつが参加するのは危険すぎる。

捕まえたとしても、その後が………考えるのはよそう。吐き気がしてきた。

卓「なんか今のジョークじみたのネットで見たことあるよーな。実在してるとは怖いね」

城「逆のパターンも存在してるかもな。超美人でかわいい女の子を捕まえたら賞金という」

「そのゲームどこで開催するんだ!?!」

レズ女王《モモ先輩》と変態帝王《岳人》が血走った目で迫ってくる。

城「例えで言っただけだったの。それに岳人、お前は男だろうが……」

そこまで女とにやんにやんしたいのか……

………なんか言い方が古くさかったな。すまん。

百「なんだつまらん……。それなら城。お前の完璧な体にもう一回触らせてくれ」

手をわきわきさせるな！！

誰が触らせるか！！

百「逃げるつもりか！ユキ、ワン子、捕まえろ！！」

小「ほーい」

—「え？お姉さま、城の体に興味があるの？」

俺を捕らえようとする、ユキとモモ先輩から上手く逃げる。

百「さつき服越しで胸板を撫でてみたんだが……私にはわかる。あれは最強の男が持つプロポーションだと！」

—「え、ええええええ！？」

いや、意味がわからないんですけど……ワン子はなにを想像したの

か知らんが、耳まで真つ赤に……って、あぶね！！  
モモ先輩、俺が相手だからって容赦がないんですけど！  
ユキはユキで俺が教えた技を駆使して、攻撃してくるし……なんで  
朝からこう戦闘ばっかなのかなあ。

岳「理想の筋肉といったら、俺様の体に見とれるはずなのに、なん  
で城なんだよ！」

卓「岳人のはなにも考えずに鍛えてるだけだから、暑苦しい位置に  
筋肉があるんだよきつと」

岳「なんだとモロ。お前遠まわしに俺をバカだつて言つてねえか？」

卓「（あ、岳人でもわかるんだ）」

忠「……やれやれあさつばら元気なやつらだぜ……（かく言う俺も  
この日常を楽しんでるみてーだがな……やれやれ。あのお人よしの  
バカのせいだな……ったく）」

翔「おおっ！今から城を捕まえれば賞金をもらえるんだな！俺も行  
くぜい！！」

大「おいキャップ！……主催者もスポンサーもないのに、賞金が出  
るわけないだろ……京？」

京「……城×翔……岳×卓……」

大「（……聞かなかったことにしよう）」

今日も風間ファミリーは暴走気味である。

その訳30メートル後方に一人の女の子がファミリーたちを凝視していた。

？「はあ……楽しそうだなあ。面白い人たちですよね松風」

松？「面白いというか、おかしいというか、微妙なラインじゃないかな？」

？「こらそういうことを言うてはダメです」

松「ごめんよー」

？「同じ寮ということで仲間に入れないかな？」

松「がんばれまゆっち！まゆっちなら出来る！フレキシブルな考え方で行くんだぜ！」

がんばれまゆっち！君の未来は明るいぞ！

多分

それより10メートル後方

小杉「あそこにいるのは一条先輩にその他皆さん……！声かけようかな？でも馴れ馴れしい娘だっと思われるのはブレーミアムに嫌だしなあ……」

心「むむっ！あの後姿は一条にその他多数ではないか！楽しそうじやのう……此方も仲間に………はっ！？なにを考えておるのじゃー！！高貴なる此方が一緒に混ざってバカ騒ぎをしたいなどと……！」

「「……………」」

しばし見詰め合う二人。

「「あわわわわわわっ！不死川先輩！？（によわーー！！！武蔵！？）」」

小杉「いいいい、今の聞こえていました？！」

心「そそそそ、そなたこそ此方の呟きを耳にしたのではあるまいな！？」

「「……………」」

また見詰め合う二人。

小杉「不死川先輩」

心「武蔵」



「仲間ですっ（じゃ！）」

なにか思うところがあったのか、抱き合う二人。

……この二人、先ほどの一年生と気が合うのかもしれない。

そして、さらに10メートルほど後方では……

準「ああ……幼女は手折るもんじゃねえ。愛でるもんだ」

冬「おやおや。準はホント小さな子供が大好きなのですね」

準「俺にとって幼女を崇拝するのは人生そのもの！ちっちゃい子と風呂に入れるなら、魂を奉げてやってもいいくらいだ！」

冬「でしたら、美少年の小学生も範囲に入れたらどうです？」

準「ぶはっ！！若、俺までBLの世界に引きずりこもうとしないでくれ！俺はあの純粹無垢な小さい女の子にしか興味はないんだ！！」

冬「そうですか……私はそっちのほうがいいんですけどねえ」

……今日も変態橋はおかしな人でいっぱいだった。

運命の罰ゲーム！……邪気眼とか写輪眼ってあこがれるよね？（後書き）

終了時イベント

大和「今日はこれで終わりか。また次話で会おうな」

岳人「そして……愛を捨て哀に生きる者の祭が今始まる！！」

忠勝「始まんねーよ。やるなら他のアホどもとやってろ」

卓也「参加したくないなあ」

城「自ら、負け犬ってことを認めるもんだからな」

翔一「そんなことよりみんなで城の家に遊びにいこーぜ！！」

そろそろ

岳人「って……あれ？おーいみんな？どこに行っちゃったんだよー  
ー」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0757o/>

---

真剣で怠け者に恋しなさい!

2011年3月28日00時45分発行